

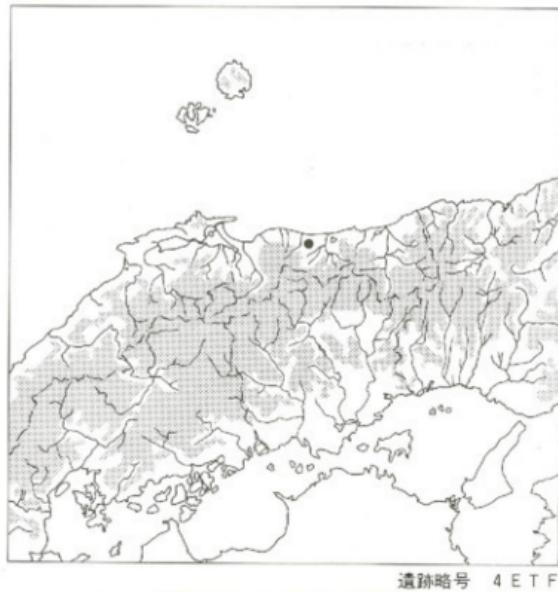
# ニタ子塚遺跡発掘調査報告書

平成6年度

倉吉市教育委員会

ふ　た　ご　づか  
二タ子塚遺跡発掘調査報告書

倉吉市教育委員会  
氏寄贈



遺跡略号 4 E T F



鳥取大学附属図書館

<10>0050052729

平成 6 年度

倉吉市教育委員会

## 序

この報告書は、平成6（1994）年度に、国営船上山・小田股ダム建設に係る採石事業に伴う事前調査として、中国四国農政局東伯農業水利事業所の委託を受け、倉吉市津原字フタゴ塚において実施した発掘調査の記録です。

今回の発掘調査により、弥生時代末期から古墳時代前期に連続する土壙墓群と古墳群を検出しました。これは、当地方の古墳時代の始まりを考える上で貴重な資料となるものです。

この報告書が多くの方々に活用されて歴史解明の一助となれば幸いに思います。

最後に、発掘調査にあたり御協力いただいた中国四国農政局東伯農業水利事業所をはじめ、津原地区の方々、現場作業、内務整理に従事していただいた方々に感謝の意を表するものです。

平成7年3月

倉吉市教育委員会

教育長 小川幸人

## 例　　言

1. 本報告書は、平成6年度に倉吉市教育委員会が、中国四国農政局東伯農業水利事業所の委託を受け、国営船上山・小田殿ダム建設に係る土砂採取事業に伴う事前調査として、倉吉市津原字フタゴ塚において実施した発掘調査の記録である。

2. 発掘調査団は次のような組織・編成である。

團長 小川 幸人（倉吉市教育委員会教育長）	
調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）	
手嶋 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）	
調査員 根鈴 雄輝（倉吉博物館学芸員）	眞田 広幸（文化課文化財係長）
森下 哲哉（文化財係主任）	根鈴智津子（文化財係主事）
竹宮亜也子（文化財係主事）	加藤 誠司（文化財係主事）
岡本 智則（文化財係主事）	竹中 孝浩（鳥取県教育委員会派遣調査員）
高取 英雄（鳥取県教育委員会派遣調査員）	
調査補助員 山根 雅美	
事務局 福井 駿夫（教育次長）	生田 淳美（文化課長）
中原 拓恵（文化課長補佐）	猪口 洋志（文化財係主事）
高山 りさ（文化財係主事）	
内務整理 泉 美智子・松田 恵子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・青戸 千秋	
谷崎 恵子・竹嶋 晴子・児玉美佐子	

3. 現場での調査は加藤・高取が、遺構の図面整理は加藤・高取・根鈴智・松田が担当した。遺物実測・遺物写真は、加藤・高取・根鈴智が担当した。浄書は、泉・世浪・妻藤が担当した。

4. 第IV章は、牛骨の鑑定結果について鳥取大学医学部医学科解剖学第2講座 井上貴央教授に御寄稿いただいたものである。記して謝意を表するものです。

5. 本書の執筆は、第I・II・V章、第III章1号墳を加藤が、第III章遺物を根鈴智が、それ以外は高取が担当した。編集は松田が担当した。

6. 造構測量のための基準杭設置を株式会社ウエスコ倉吉事務所に委託した。

7. 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1:50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成元年修正測量の1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

8. 掘図中の方位は、国土座標第V座標系の北を示す。

9. 遺物に付した記号・番号は、本文・掘図・図版で統一している。

10. 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

## 本文目次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
1.	遺構	8
(1)	土壙墓群	8
(2)	古墳群	16
(3)	土壙	33
2.	遺物	34
IV	鑑定	45
V	二タ子塚 6号墳	46
VI	考察	48

## 挿図目次

第1図	曾吉市周辺の地形と遺跡分布図	3
第2図	二タ子塚遺跡調査区位置図	4
第3図	二タ子塚遺跡全図	5
第4図	土壙墓群全体図	7
第5図	1・2号土壙墓遺構図	8
第6図	3・4号土壙墓遺構図	10
第7図	5・6号土壙墓遺構図	11
第8図	7号土壙墓・1号溝遺構図	12
第9図	1号溝遺物出土状況図	13
第10図	8~10号土壙墓遺構図	14
第11図	2~4号溝遺構図	15
第12図	1号墳遺構図	17
第13図	1号墳主体部遺構図 1	18
第14図	1号墳主体部遺構図 2	19
第15図	1号墳周溝内埋葬施設遺構図	21
第16図	2号墳遺構図	23
第17図	2号墳 1・2号主体部遺構図	24
第18図	3~5号墳遺構図	25
第19図	3号墳 1・2号主体部遺構図	27
第20図	3号墳周溝内埋葬施設遺構図	29
第21図	4・5号墳主体部遺構図	31
第22図	1号土壙遺構図	32
第23図	2・3号土壙遺構図	33
第24図	3~6号土壙墓出土遺物図	35
第25図	1~3号溝出土遺物図	37
第26図	1・2号墳出土遺物図	38
第27図	3号墳出土遺物図 1	39
第28図	3号墳出土遺物図 2	41
第29図	5号墳・1号土壙出土遺物図	42
第30図	鉄器・石器遺物図	43
第31図	二タ子塚 6号墳填丘測量図	47
第32図	木棺型式	50
第33図	二タ子塚遺跡遺構変遷模式図	52

## 図版目次

- 図版1 亂葬 調査前空中写真 調査区空中写真 調査後全景
- 図版2 亂葬 土壙墓群検出状況 土壙墓群完掘 1号土壙墓
- 図版3 亂葬 2号土壙墓 3・4号土壙墓 5号土壙墓
- 図版4 亂葬 6号土壙墓 8号土壙墓 9号土壙墓
- 図版5 亂葬 7号土壙墓・1号溝 1号溝遺物出土状況 1号溝供試台出土状況
- 図版6 亂葬 2号溝 3号溝 4号溝
- 図版7 亂葬 1~5号墳 1号墳
- 図版8 亂葬 1号墳主体部石棺内掘下げ 1号墳主体部粘土床断面 1号墳主体部粘土床検出状況
- 図版9 亂葬 1号墳主体部散石検出状況 1号墳主体部完掘 1号墳周溝内埋葬施設
- 図版10 亂葬 2号墳 2号墳主体部検出状況 2号墳主体部完掘
- 図版11 亂葬 3号墳 3号墳主体部 3号墳周溝内遺物出土状況
- 図版12 亂葬 3号墳周溝内埋葬施設土器棺出土状況 3号墳周溝内埋葬施設  
3号墳周溝内埋葬施設完掘
- 図版13 亂葬 4号墳 4号墳主体部 5号墳
- 図版14 亂葬 5号墳主体部 1号土壙 2号土壙 3号土壙
- 図版15 亂葬 二爻子塚 6号墳全景 1号主体部 2号主体部
- 図版16 亂物 5号土壙墓・6号土壙墓・1号溝・2号溝・2号墳出土遺物
- 図版17 亂物 3号墳出土遺物
- 図版18 亂物 3号墳出土遺物 鉄製刀子・鉄斧・石鎌・砥石・石鍤
- 図版19 番定 牛骨

## I 発掘調査に至る経緯

平成4年2月、中国四国農政局東伯農業水利事業所より、国営東伯農業水利事業船上山ダム・小田股ダム建設工事に係る谷原石山採石場の拡張計画が提示された。開発予定地の踏査を実施したところ、丘陵尾根中央で古墳の高まりを確認した。また丘陵北端には、昭和48年の踏査時に古墳を2基確認している。このため倉吉市教育委員会が、予備調査を平成5年5月11日～6月11日まで行った。この結果、丘陵尾根部分を中心に古墳の周溝、箱式石棺墓、弥生土器、土師器などを検出して、遺跡の存在が明らかになった。<sup>(註)</sup>倉吉市教育委員会は、東伯農業水利事業所と協議を計った結果、既存の採石場に近い尾根部分の3200m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することとなった。調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、1994（平成5）年9月5日～12月28日まで実施した。

（註）竹宮亜也子「津原地区（ニタ子塚遺跡）」「倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅷ」倉吉市教育委員会 1995年

## II 位置と歴史的環境

ニタ子塚遺跡は、倉吉市街地から北西に約7km離れた倉吉市津原字フタゴ塚に所在する。遺跡の所在する灘手地区（旧灘手村）の地形は、大山の火山活動によって形成された洪積性の丘陵が樹枝状に入り組んでいる。これら丘陵の北側には標高約1～2mの灘手低湿地帯が広がっている。調査地は南西～北東に伸びる標高70～60m前後の丘陵尾根上で、付近の最高所を含む標高70～74mの地点にある。水田面と調査地の比高差は約60mである。調査前は、調査区全体が畠作を放棄した後の荒れた状態で、密集した笹竹林と雜木林であった。同一丘陵上には、清水谷古墳群（10）が所在し、1973年の調査により箱式石棺墓を主体とする古墳を2基検出した。このうち清水谷1号墳からは、内行花文鏡が出土している。その他、予備調査で箱式石棺墓、古墳周溝、古墳状の高まりを確認している。また、ニタ子塚遺跡が所在する丘陵の東側裾に所在する郊家平古墳群では、1987年の調査により横穴式石室を主体とする古墳を3基検出している。

ニタ子塚遺跡の所在する灘手地区を含めた倉吉市西郊には、数多くの遺跡が所在する。以下、分布図範囲内の遺跡を中心に概要を述べる。

旧石器時代の遺物は、中尾遺跡（44）から出土した国府型ナイフ型石器（黒曜石製・安山岩質各1）、長谷遺跡から出土したナイフ型石器（安山岩質）などがある。

縄文時代の遺跡は、早期の竪穴式住居址と礫群、押型文土器が出土した取木遺跡（59）、84基の落し穴、前～晚期の土器が出土した中尾遺跡、57基の落し穴、尖頭器や早期の押型文土

器、後期・晩期の深鉢が出土した長谷遺跡がある。その他に縄文時代早期の土器が出土した遺跡としては、大栄町大谷第1遺跡・大谷築山遺跡が、縄文時代中期～後期の土器が出土した遺跡は、大栄町青木第1遺跡・後ろ谷遺跡・上種第5遺跡・中峯遺跡(64)がある。落し穴は、青木第4遺跡、頭根後谷遺跡(9)・大仙峯遺跡(7)・大山遺跡(8)・イキス遺跡(58)からも検出している。

弥生時代の遺跡は、前期では土墳墓群の出土した、大栄町後ろ谷遺跡、イキス遺跡がある。中期では、水晶の玉作工房跡が出土した大栄町西高江遺跡や青木第2遺跡がある。後期になると遺跡の数は増大する。大仙峯遺跡・大山遺跡・コザンコウ遺跡(62)・道祖神峰遺跡(61)・遠藤谷峯遺跡(65)・白市遺跡(63)・中峯遺跡・大沢前遺跡(66)、大栄町東高江遺跡・高江神社遺跡・別所経塚遺跡・青木第4遺跡・上種第5遺跡などの集落址がある。このうち中峯遺跡では鳥形スタンプ文土器が出土している。これらは、ほとんどの遺跡が古墳時代も営まれる。墳墓では、四隅突出型墳丘墓が3基出土し国史跡に指定された阿弥大寺墳丘墓群(78)、四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群(32)の弥生墳墓、方形の削り出し墳丘墓を2基検出し吉備系の大型壺が出土した大谷後谷墳丘墓群(55)、手培り形土器の出土した三度舞墳丘墓(36)がある。これらはいずれも弥生時代後期の墳丘墓である。

古墳時代になると、丘陵上に多くの古墳が造られる。倉吉市西郊の前期古墳としては、粘土櫛(長さ約7m・幅約1.4m)を主体とし、菱鳳鏡・三角縁神獸鏡・鉄器などの出土した国分寺古墳(45・前方後円〈方〉墳・全長60m)、箱式石棺墓を主体とし、三角縁神獸鏡・琴柱型石製品の出土した上神大将塚古墳(31・円墳・径30m)、竪穴式石室の出土した向山古墳群宮ノ峰21号墳、方墳を密集して検出した猫山遺跡(30)がある。古墳時代後期の前方後円墳は、横穴式石室を主体とする大栄町西總波16号墳(全長38m)、箱式石棺墓を主体とする高鼻2号墳(14・全長26m)、大塚山古墳(13・全長52m)、帆立貝式の前方後円墳である大栄町下種8号墳(全長31m)・上種西14号墳(全長36m)などがある。その他に発掘された古墳として、蛇行鉄劍の出土した頭根後谷遺跡、大栄町妻波古墳群、大山遺跡、横穴式石室を主体部とする東鳥ヶ尾古墳(6)、横穴式石室を主体部とする7世紀代の方墳を検出した取木遺跡・一反

1 亀谷古墳群	13 大塚山古墳	25 桜木遺跡	37 津ベリ遺跡(1次)
2 亀谷第1遺跡	14 高鼻2号墳	26 谷畠遺跡	38 津ベリ遺跡(2次)
3 下種古墳群	15 島遺跡群	27 西山遺跡	39 不入間遺跡
4 下種東古墳群	16 曲古墳群	28 トドロケ遺跡	40 イザ原古墳群
5 効家平古墳群	17 島古墳群	29 東狭間古墳	41 大谷大将塚古墳
6 東鳥ヶ尾古墳	18 上神古墳群	30 上神猫山遺跡	42 小林古墳群
7 大仙峯遺跡	19 上神45号墳	31 上神大将塚古墳	43 大谷古墳群
8 大山遺跡	20 上神44号墳	32 柴栗古墳群	44 中尾遺跡
9 頭根後谷遺跡	21 上神48号墳	33 西前遺跡	45 国分寺古墳
10 清水谷古墳群	22 上神51号墳	34 星喜山古墳群	46 北ノ城城跡
11 西焼古墳群	23 上神119号墳	35 星喜山9号墳	47 挿塚遺跡
12 清水谷尻1号墳	24 クズマ遺跡	36 三度舞墳丘墓	48 打塚遺跡



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

(1 : 50,000)

49 古神宮古墓	61 道祖神峰遺跡	73 観音堂造跡	85 福本家ノ上古墓
50 宮ノ下遺跡	62 コザンコウ遺跡	74 並塚古墳群	86 上野遺跡
51 伯耆国分尼寺跡	63 白市遺跡	75 上福田横穴群	87 砂路
52 伯耆国分寺跡	64 中峯遺跡	76 砂路	88 矢戸遺跡
53 伯耆国序跡	65 連藤谷峯遺跡	77 小谷遺跡	89 岩屋遺跡
54 古墳群	66 大沢前遺跡	78 阿彌大寺墳丘墓群	90 福田寺遺跡
55 大谷後口谷墳丘墓群	67 大道谷遺跡	79 下小畠遺跡	91 島根遺跡
56 古墳群	68 昭和開拓遺跡	80 奥田遺跡	92 今倉遺跡
57 四王寺跡	69 勝負谷遺跡群	81 笹ヶ平遺跡	93 今倉城跡
58 イキス遺跡	70 鶏塚古墳群	82 後中尾遺跡	94 市場城跡
59 取木遺跡	71 ケンカ塚古墳群	83 高城城跡	
60 一反半田遺跡	72 稲兎ケ墓古墳群	84 後口谷遺跡	

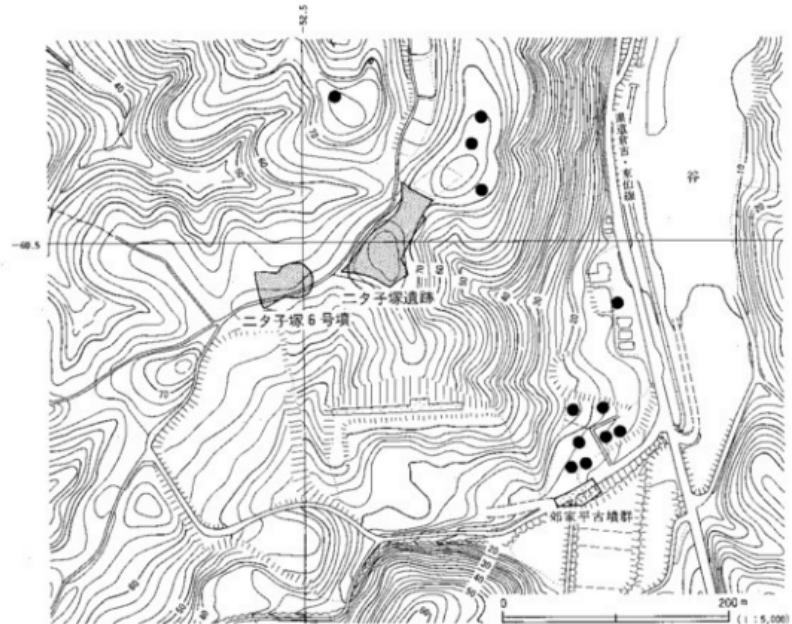
半田遺跡(60)などがある。

奈良時代になると、久米ヶ原丘陵東端部周辺に伯耆国庁(53)・伯耆国分寺(52)・伯耆国分尼寺(51)、大型建物群を検出し官衙跡と推定されている不入岡遺跡(39)が近接して設けられ伯耆国の政治・文化の中心となる。平安時代には、四王寺山山頂に四王寺(57)が建立された。

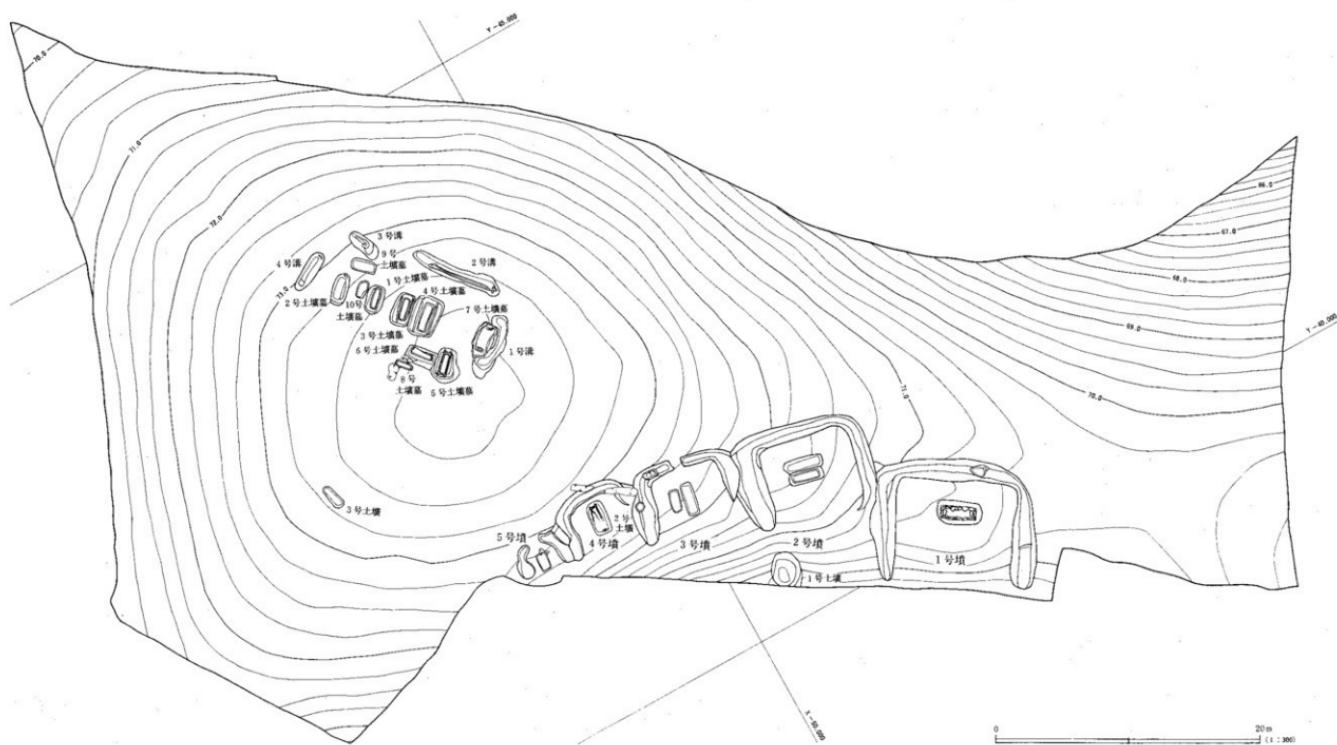
### III 調査の概要

調査は石材が散乱し墳丘状の高まりのある1号墳の部分を除き重機により表土を除去した。表土除去後人力による検出を行い、遺構の掘り下げを行った。

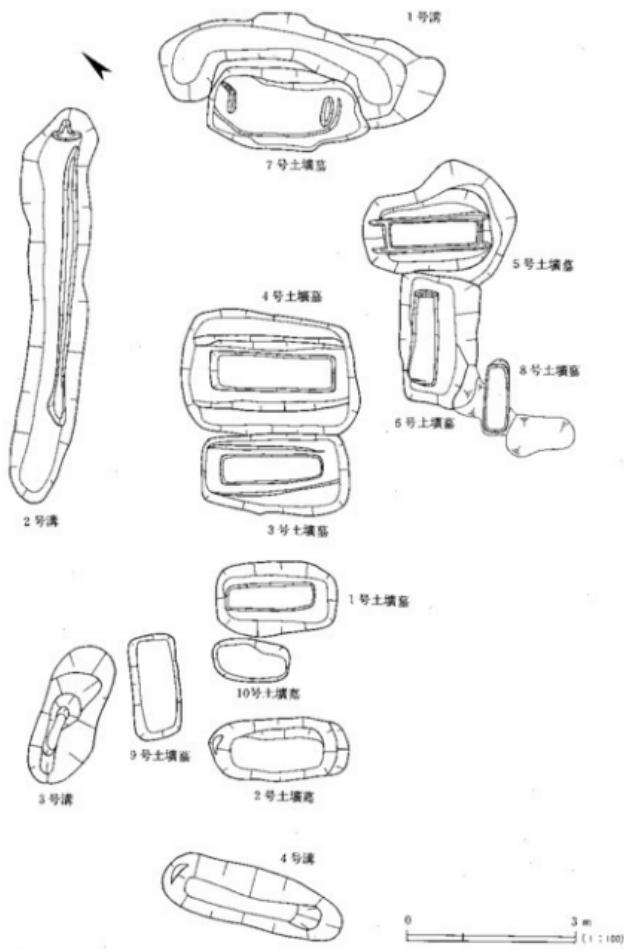
調査地の基本層序は、茶褐色土（表土・旧耕作土）、暗褐色土（ソフトローム土）、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）、黄褐色砂質土（AT：始良・丹沢火山砂層）、橙褐色粘質土（疊混じり粘質層）、黄褐色土（DKP：大山・倉吉蛭石層）の順である。遺構の検出は、暗褐色土（ソフトローム土）上層でおこなったが、尾根頂部については暗褐色土（ソフトローム土）、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）、黄褐色砂質土（AT：始良・丹沢火山砂層）の堆積状態が悪く、暗褐色土（ソフトローム土）に、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）、黄褐色砂質土（AT：



第2図 ニタ子塚遺跡調査区位置図



第3図 ニタ子塚遺跡全図



第4図 土墳群全体図

始良・丹沢火山砂層）がブロック状に混じる面で検出した。調査後の面積は3200m<sup>2</sup>である。造構の測量は国土座標による4mメッシュを組み、1号墳・2号墳の主体部と遺物出土状況図についてはS=1/10で、その他の造構はS=1/20で実測した。調査地の調査後地形測量及び、ニタ子塚6号墳の墳丘測量は平板を使用し、S=1/100、25cm毎の等高線で測量した。

調査の結果、土墳墓10基、土墳墓に伴う溝4条、古墳5基・周溝内埋葬施設2基、土墳3基（うち落し穴1基）を検出した。

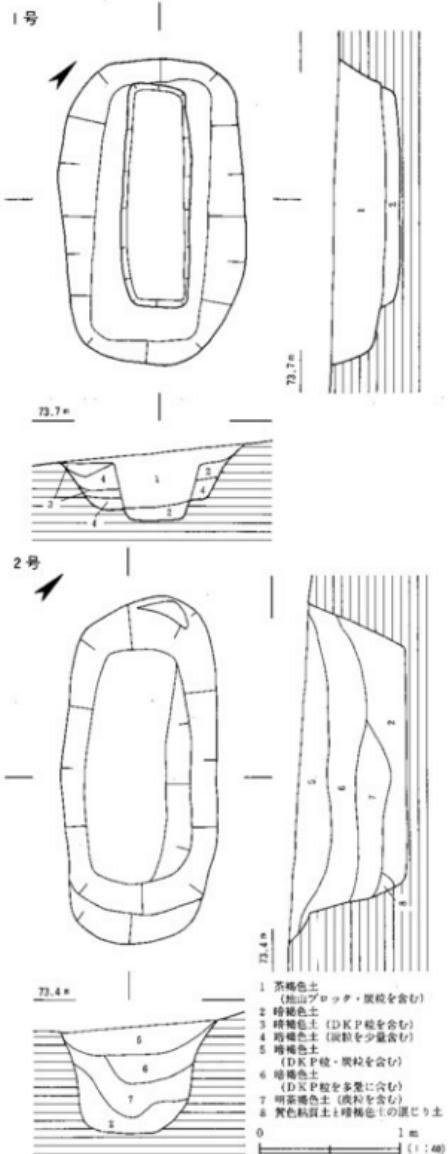
## 1. 遺構

### (1) 土壙墓群

調査区の最高所(標高74m)からわずかに西側に寄った場所を中心にして、10基からなる土壙墓群を検出した。4条の溝によって北・西・南(土壙墓群文中の方位は全て便宜上1号溝を北とした)の3方を区画された、長軸15m・短軸9mの方形の墓域内に規則的に配置されている。各土壙墓の主軸方向は、尾根と直交するもの( $N33^{\circ}W \sim N51^{\circ}W$ )と平行するもの( $N41^{\circ}E \sim N51^{\circ}E$ )に分かれ。前者に属するものは1・5・7・10号の7基、後者に属するものは6・8・9号の3基である。土壙墓間の切り合いはほとんど無く、3・4号と5・6号が一辺を共有している程度であった。木棺痕跡は、平・断面の観察によって1・3・7・9号の7基で検出された。

遺物は全体に少なく、棺内に副葬されたものは全く無かったが、5・6号の2基で棺上に供獻された土器と標石と考えられる石が出た。また、1号溝と2号溝でもまとまった遺物が出土した。

**1号土壙墓** 土壙墓群の南部、2号土壙墓と3号土壙墓の間に位置し、主軸方向は $N45^{\circ}W$ である。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は2段になっており、規模は上段が長さ2.22m・幅1.36m・深さ



第5図 1・2号土壙墓遺構図

0.39m、下段が長さ1.58m・幅0.58m・深さ0.10mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.49mであった。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ1.55m・幅0.55m程度の木棺が納められていたと推定される。

遺物は、墓壙底から埋葬時に混入したと思われる安山岩質石鐵S3が1点出土した。

**2号土壙墓** 土壙墓群の南端、1号土壙墓と4号溝の間に位置し、主軸方向はN51°Wである。平面形は長楕円形で、墓壙掘り方の規模は長さ2.41m・幅1.10m、検出面からの深さは0.76mを測る。平・断面とも木棺痕跡は検出されなかった。

**3号土壙墓** 1号土壙墓と4号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN39°Wである。1辺を共有する4号土壙墓と共に中心的な位置にある。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は3段になっている。規模は上段が長さ2.62m・幅1.42m・深さ0.51m、中段が長さ2.40m・幅0.84m・深さ0.06m、下段が長さ1.82m・幅0.50m・深さ0.26mで、検出面から墓壙底までの深さは0.83mを測る。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ1.75m・幅0.45m・高さ0.30m程度の木棺が納められていたと推定される。中段の掘り方の南側壁沿いに幅0.06m前後の炭化物層が検出された。

遺物は土器片がわずかに出土した。このうち1片は底部片であった。

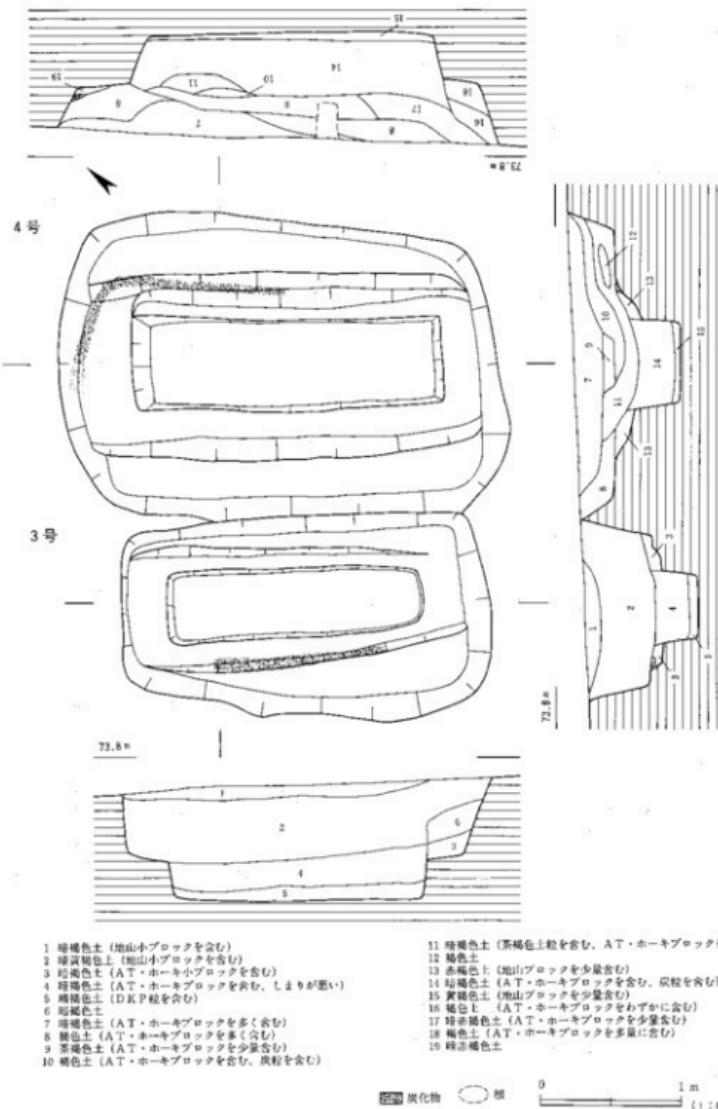
**4号土壙墓** 3号土壙墓と7号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN42°Wである。1辺を共有する3号土壙墓と共に中心的な位置あり、規模も最大のものである。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は3段になっている。規模は上段が長さ3.12m・幅2.11m・深さ0.33m、中段が長さ2.82m・幅1.34m・深さ0.16m、下段が長さ2.20m・幅0.66m・深さ0.26mで、検出面から墓壙底までの深さは0.75mを測る。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ2.00m・幅0.60m・高さ0.40m程度の木棺が納められていたと推定される。中段の掘り方の北側壁沿いに幅0.06m前後の炭化物層が検出された。

遺物は土器片がわずかに出土した。

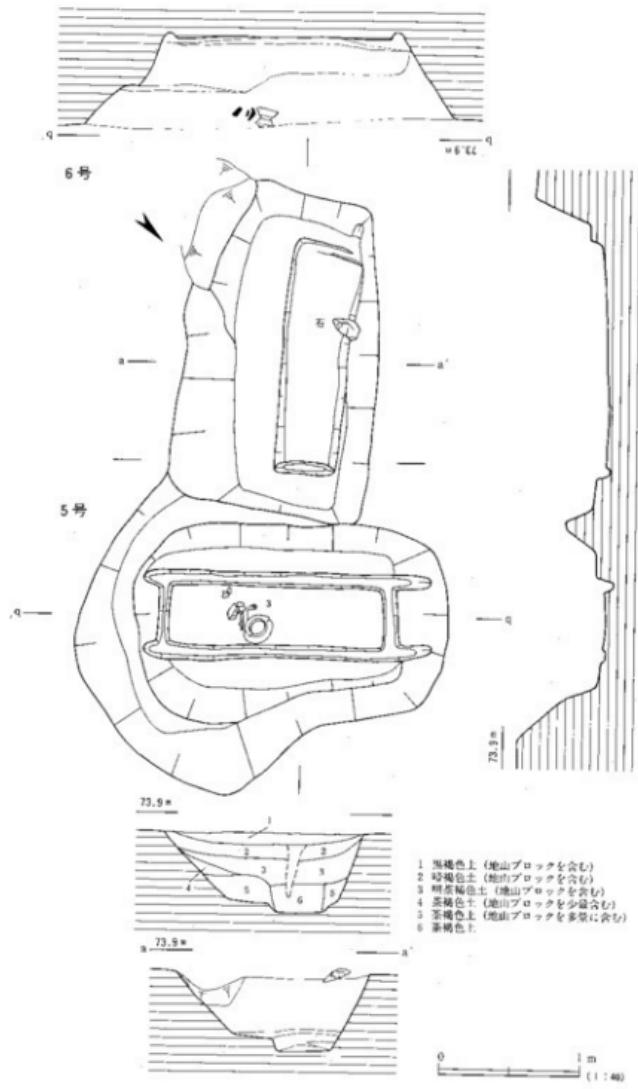
**5号土壙墓・6号土壙墓** 5・6号土壙墓は検出面で黒褐色土が見られたため、当初土壙墓群の東西辺の区画溝を想定していた。従って、検出面から別々に十字ベルトを組んで掘り下げることができなかった。また、検出面の遺物は一括で取り上げてしまったため、壺6・甕・石錘S2の他、若干量の土器片がどちらの土壙墓に伴うものか特定できなかった。

**5号土壙墓** 土壙墓群の東部、土壙墓群中最高所に位置する。主軸方向はN40°Wで、6号土壙墓とT字状に接する。平面形はいびつな長楕円形で、墓壙底には小口板と側板の痕跡が残っていた。これによって推定される木棺の規模は、内法で長さ1.50m・幅0.40m程度である。側板の長さは1.80m程度と推定され両小口間の距離よりも長くなつておらず、小口板を側板で挟み込むよう形の木棺であったと推定される。

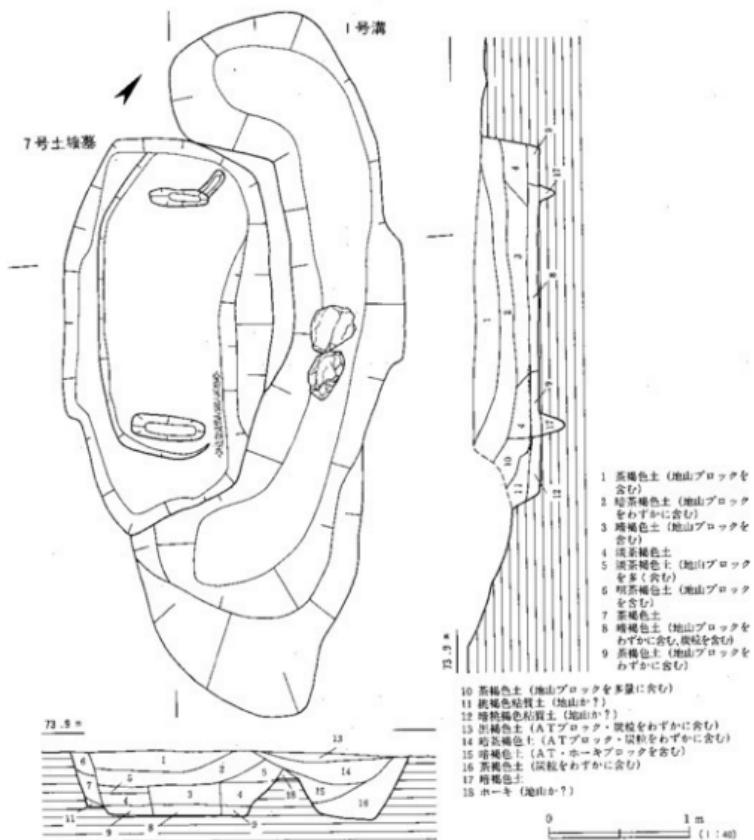
遺物は検出面の中央や東寄りから注口土器2・器台3等が出土したほか、長さ23cmの標石と考えられる石が出土した。



第6図 3・4号土壤墓遺構図



第7図 5・6号土壤墓遺構図



第8図 7号土塙墓・1号溝遺構図

6号土塙墓 土塙墓群の東部に位置する。主軸方向はN51°Eで、5号土塙墓とT字状に接する。平面形は隅丸長方形、墓塙掘り方は不明瞭な2段掘りで、規模は上段が長さ2.20m・幅1.38m・深さ0.49m、下段が長さ1.64m・幅0.46m・深さ0.06mで検出面からの深さは0.55mを測る。墓塙底には北側に小口板を立てるための溝が掘られており、南西側にも不明瞭ながら小口板の痕跡が認められた。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ1.60m・幅0.40m・高さ0.30m程度の木棺が納められていたと推定される。

遺物は検出面の中央やや南西寄りから注入土器4・甕5等が出土したほか、10cm四方の標石と考えられる石が出土した。

**7号土壙墓** 土壙墓群の北端に位置し、1号溝と接する。主軸方向はN33°Wである。一部不明瞭な部分があるが推定される墓壙掘り方の規模は、長さ2.80m・幅1.40m程度で、検出面からの深さは0.46mを測る。墓壙底には両小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは東側0.52m、西側0.42mを測り、東側のほうが長い。このため、おそらく頭位は東だろうと推定される。この小口板痕跡と埋土の堆積状況から、長さ1.60m・幅0.50m程度の木棺が納められていたと推定される。本土壙墓は、掘り方がいびつな点、埋土に立ち上がりが見られる点、墓壙底から炭化物層が検出された点など、何等かの施設の存在もしくは別造構との切り合いが想定されるが判断できなかった。

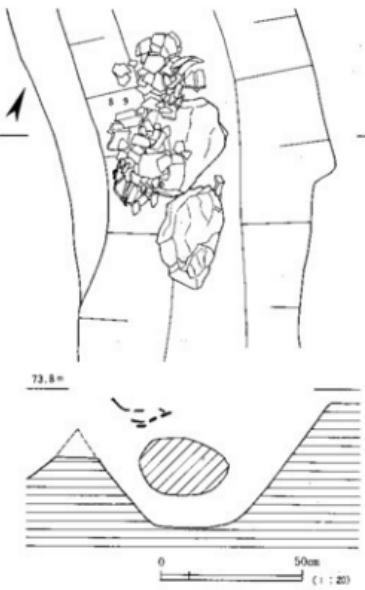
遺物は出土しなかった。

**1号溝** 尾根に直交し、土壙墓群の北を区画する。土層断面からは1号溝が7号土壙墓を切っているように見えるが、7号土壙墓の肩が崩れたためで、前後関係が逆転する可能性も考えたい。断面形はU字、平面形は両端が折れるカスガイ型で7号土壙墓を取り囲むような形になっている。検出面の規模は長さ5.02m・幅0.80m、検出面からの深さは0.46mを測る。溝の中央部は若干幅が広がっており、径0.30m程度の石が2個並んでいた。石は溝底から約0.10m浮いており、ある程度溝が埋まってからおかれた可能性もある。石の上には土器片が多く散らばっていたので、供獻台と考えられる。

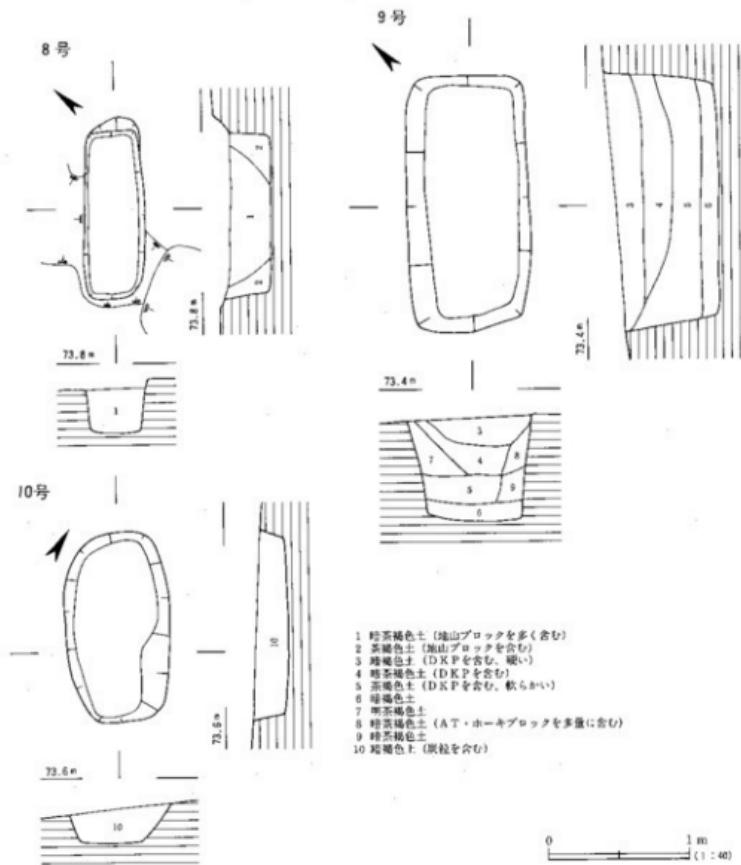
遺物は石の上を中心にして壺7～9、体部全体を貝殻腹縁の刻み目で飾った注口土器、甕10・11、器台12等の土器がまとめて出土したほか、砥石S-Iが1点出土した。

**8号土壙墓** 土壙墓群の東端、6号土壙墓の南東に位置し、主軸方向はN51°Eである。平面形は隅丸長方形で墓壙掘り方の規模は長さ1.16m・幅0.42m、検出面からの深さは0.38mを測る。土壙墓群中最小のもので、6号土壙墓との位置関係から、6号土壙墓の被葬者と近親の子供の墓の可能性が高い。平・断面とも木棺痕跡は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。



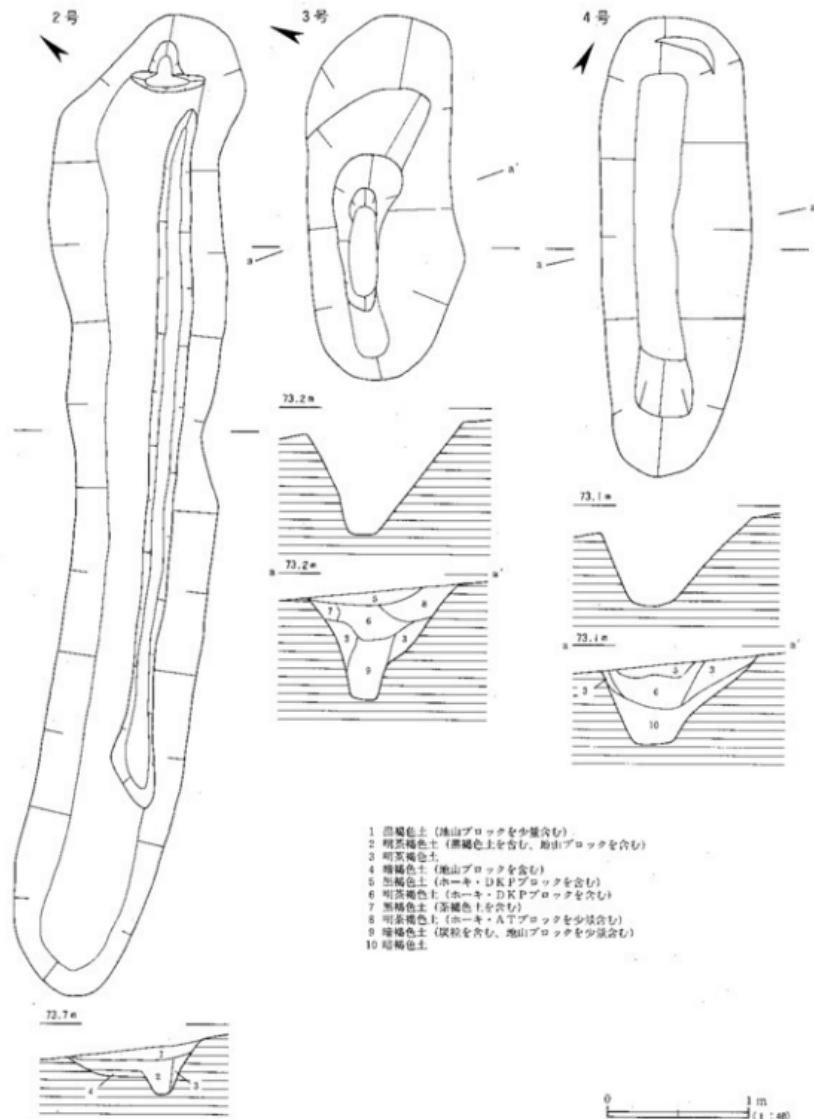
第9図 1号溝遺物出土状況図



**9号土壙墓** 土壙墓群の南西隅、1号土壙墓と3号溝の間に位置し、主軸方向はN41°Eである。墓壙掘り方の規模は、長さ1.82m・幅0.86m、検出面からの深さは0.74mを測る。墓壙底から木棺痕跡は検出されなかったが、断面に側板を支えた痕跡が見られるので木棺墓であったと考えられる。

遺物は出土しなかった。

**10号土壙墓** 土壙墓群南部、1号土壙墓と2号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN40°Wである。平面形はいびつな長楕円形で、墓壙掘り方の規模は長さ1.36m・幅0.74m、検出面からの深さは0.24mを測る。平・断面とも木棺痕跡は検出されなかった。土壙墓群内にあるため、



第11図 2 ~ 4号溝造構図

土壙墓としたが、規模が小さく掘り方もいびつなため、土壙墓以外の遺構の可能性もある。遺物は出土しなかった。

**2号溝** 尾根と平行して長く伸び、土壙墓群の西を区画する。1・2・3・4・7号土壙墓主軸とは直交する。断面形はU字形で、掘り方の規模は長さ6.96m・幅1.24m、検出面からの深さは0.20mを測る。溝底には東側に長さ4.92m・幅0.25m前後、検出面からの深さ0.12m前後の小溝が設けられている。

遺物は中央部付近の埋土上層より壺13・台付壺15、西側より壺14が出土した他、比較的多量の土器片が出土した。

**3号溝** 9号土壙墓の西に位置し、2号溝と共に土壙墓群の西を区画するが、2号溝とは軸が異なる。断面はV字形で、掘り方の規模は長さ2.60m・幅1.08m、検出面から最深部までの深さは0.78mを測る。底部はスリバチ状に深くなっている、形態的には土壙であるが、墓域を区画する位置にあり、他の溝と同様、上層に自然堆積の黒褐色土が見られたことから溝とした。土層断面には柱状のものを立てたような痕跡が認められた。

遺物は大型壺体部片16の他、若干の土器片が出土した。なお、大型壺体部片16は1・2・3号溝の上層埋土から、同一個体の破片が数片ずつ出土している。

**4号溝** 尾根と直交し、土壙墓群の南を区画する。断面はV字形で、掘り方の規模は長さ3.28m・幅1.06m、検出面からの深さは0.56mを測る。形態は土壙墓と差がないが、上層に自然堆積の黒褐色土が見られたため溝と判断した。

遺物は出土しなかった。

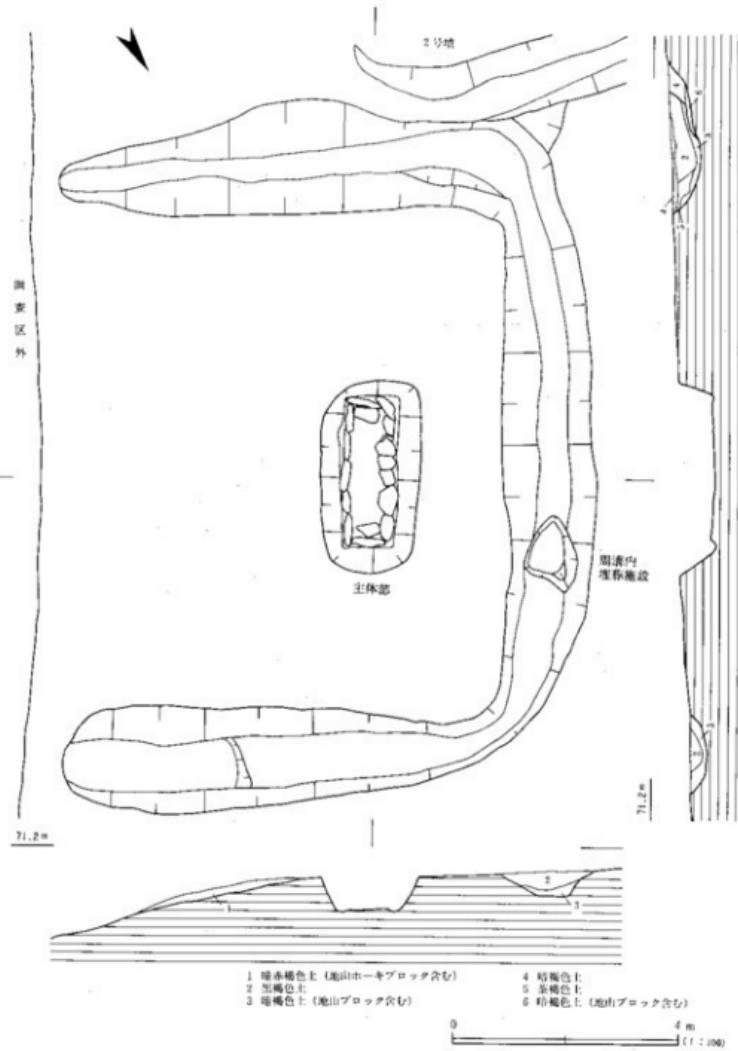
## (2) 古墳群

調査の結果、調査区北側の丘陵東側の傾斜変換点で5基の古墳を検出した。5基は全て周溝の一部が接する様に造られており、このうち2~4号墳は西辺を揃えるようにしていた。盛土は1号墳でわずかに検出された以外遺存していないが、主体部は5基全てに残っており2・3号墳では2基の主体部が検出された。このうち1号墳の主体部は地域色の強い豊穴式石室で類例の無いものであった。また、その他の埋葬施設として1号墳周溝から牛糞を、3号墳周溝から土器棺墓を検出した。

遺物は全体に少なく、副葬品は2号墳1号主体部の刀子1点のみであった。

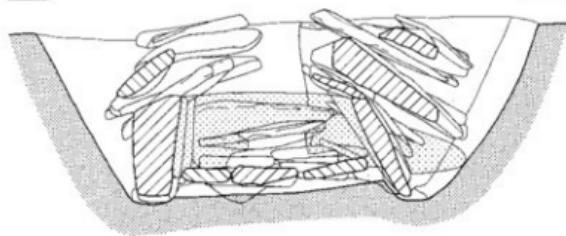
### 1号墳

**墳丘** 調査区北側の標高71~72mの丘陵東側の傾斜変換点に位置する方墳で、今回調査した古墳群のなかで一番低い位置に立地する。調査前にはわずかに墳丘状の高まりが見られ、高まりの中心付近では石材が散乱していた。表土除去後の墳丘盛土は、斜面側だけ最大で10cmの厚さで遺存していた。調査後の周溝を含めた規模は、南北12.5m・東西9.5mを測り、今回調査した古墳群中最大の規模である。

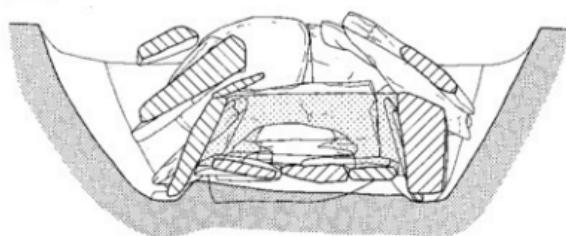


第12図 1号墳造構図

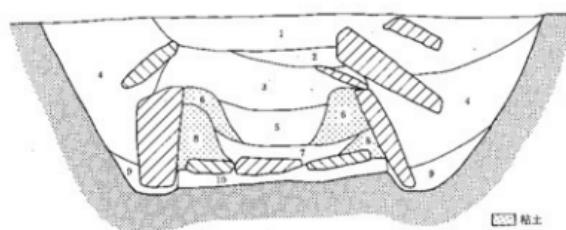
南西小口 70.8m



北東小口 70.8m



70.8m

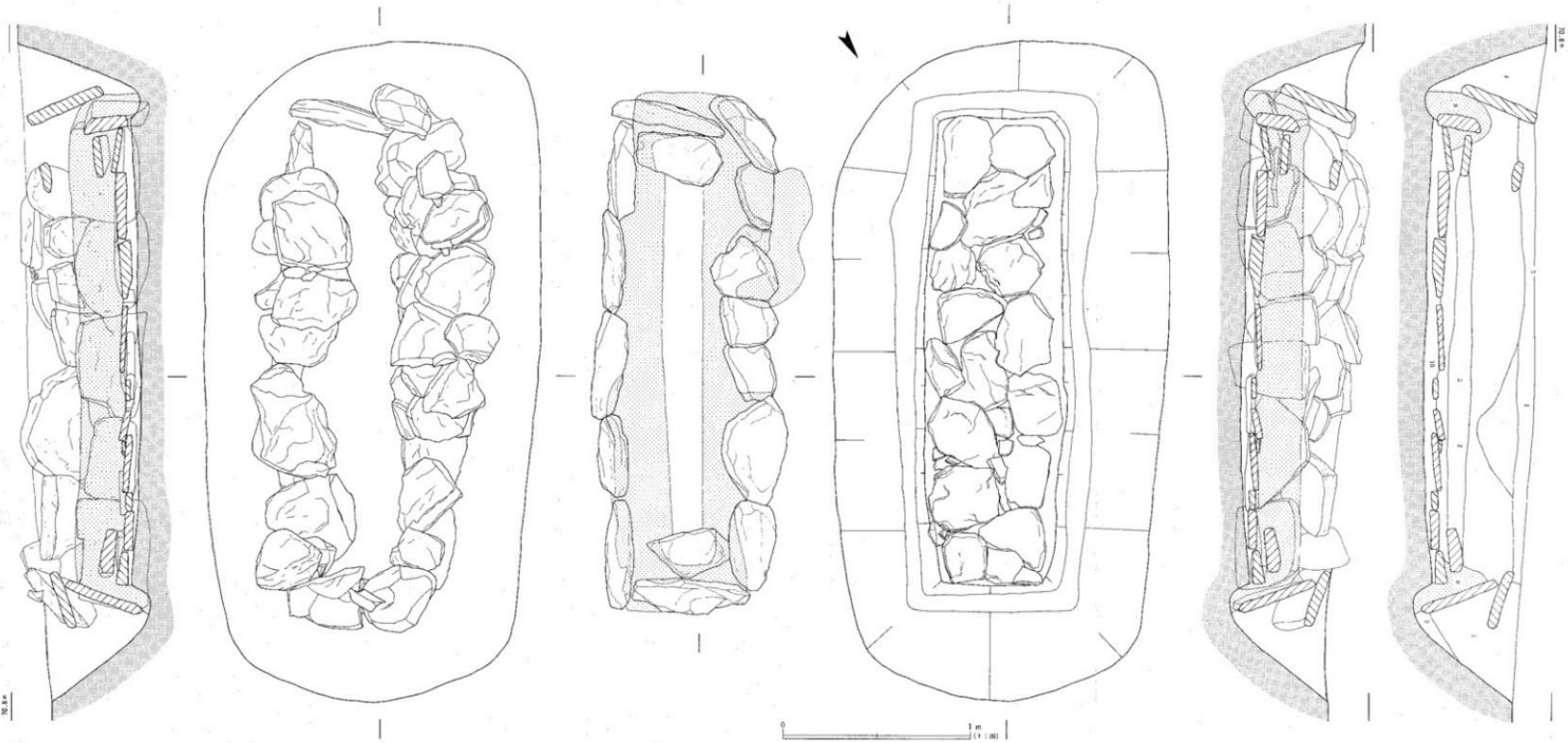


■ 粘土

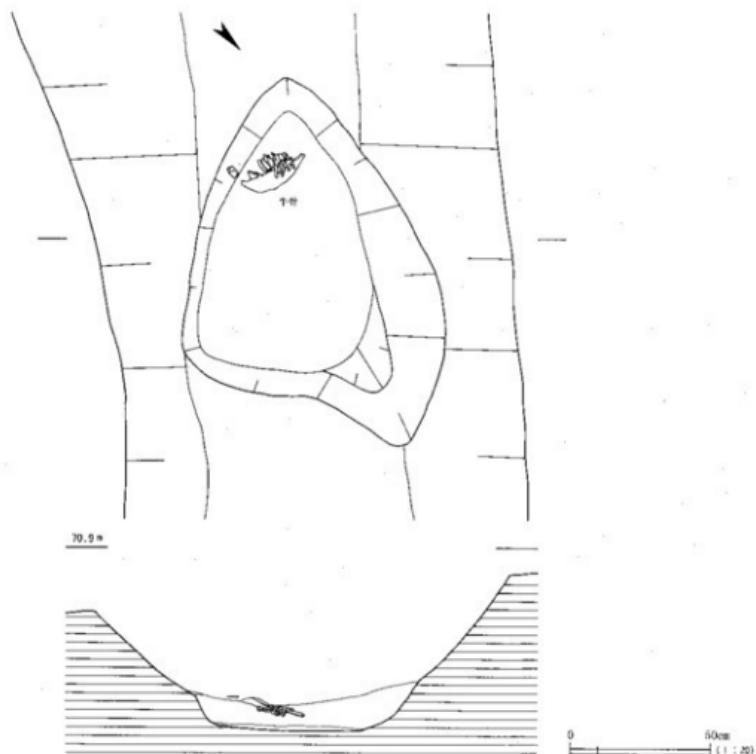
- 1 茶褐色土
- 2 棕褐色土
- 3 淡赤褐色土 (A.T.・ホーキブロックをわずかに含む)
- 4 暗赤褐色土 (A.T.・ホーキブロックを少量含む)
- 5 暗黄褐色土 (灰色粘土粒含む)
- 6 灰色粘質土 (灰色粘土粒含む)
- 7 淡黄褐色土 (灰色粘土粒含む)
- 8 灰色粘土
- 9 暗褐色土
- 10 橙褐色粘質土 (DKP粒を多量に含む)

0 1 m (1:20)

第13図 1号墳主体部造構図 1



第14图 1号填主体部遗構図2



第15図 1号墳周溝内埋葬施設遺構図

周溝 斜面の低い側を除きコの字状にめぐっている。南西側は2号墳の周溝を切っている。

幅は最大で2.2m、深さは最も深い所で0.5mを測る。

主体部 墳丘中央やや西よりに位置する。主軸方向はN32°Eで、尾根と平行する。墓壙の掘り方規模は、長さ3.5m・幅1.77mで、検出面からの深さは最も深い所で0.6mを測る。断面観察及び平面掘り下げよりU字型の粘土床を検出したため、木棺は遺存していなかったが割竹形木棺と推定した。木棺の長さは両小口の石で木棺を挟んだ間、木棺の幅は粘土のU字型の肩であると考え、復元規模で長さ1.8m・幅0.4mと推定される。粘土床の周開は基底部分が石材で囲まれ、さらに石材を二重三重に持ち送りながら積み上げていた。以上の状況から主体部は、割竹形木棺を持つ竪穴式石槨であると考える。石槨の規模は基底石の内法で、長さ2.4m・幅0.7mである。頭位は、南西側の石材が北東側に比べ若干厚く積み重なっており、南西

と推定する。

この主体部の構築方法は次のように復元できる。①墓壙を掘る。②長さ2.5m・幅0.7~0.75mの範囲で上を敷き整地する。③整地部分に約10~30cm大の板石を隙間無く敷きつめる。④基底石掘り方に土を入れ、基底石を立てて内側から灰色粘土を詰めて安定させる。⑤敷石を覆い隠すように内側に土を敷く。⑥割竹形木棺を安置し、両小口部分を石で挟み込む。⑦木棺の隙間に粘土を詰める。⑧遺体を納めたのち木棺の蓋をする。⑨木棺の上に石を立てかけながら石を中央に持ち送る。⑩墓壙を埋める。

遺物 主体部からは副葬品、土器等の遺物は出土しなかった。周溝より高環脚部17、墳丘表土除去中に小型器台18、鉄斧F1が出土した。

周溝内埋葬施設 周溝内北西側土壤より、牛の上・下顎骨及び歯が1体分出土した。周溝を検出した時点では、搅乱と考え周溝と一緒に掘り下げていたため、検出面での規模は不明であるが、周溝が埋まってから土壤が掘られている。周溝底での平面プランは不整な三角形で、規模は長さ1.13m・幅0.93m・深さ0.1mである。墓壙の長軸は周溝が伸びる方向と一致する。

## 2号墳

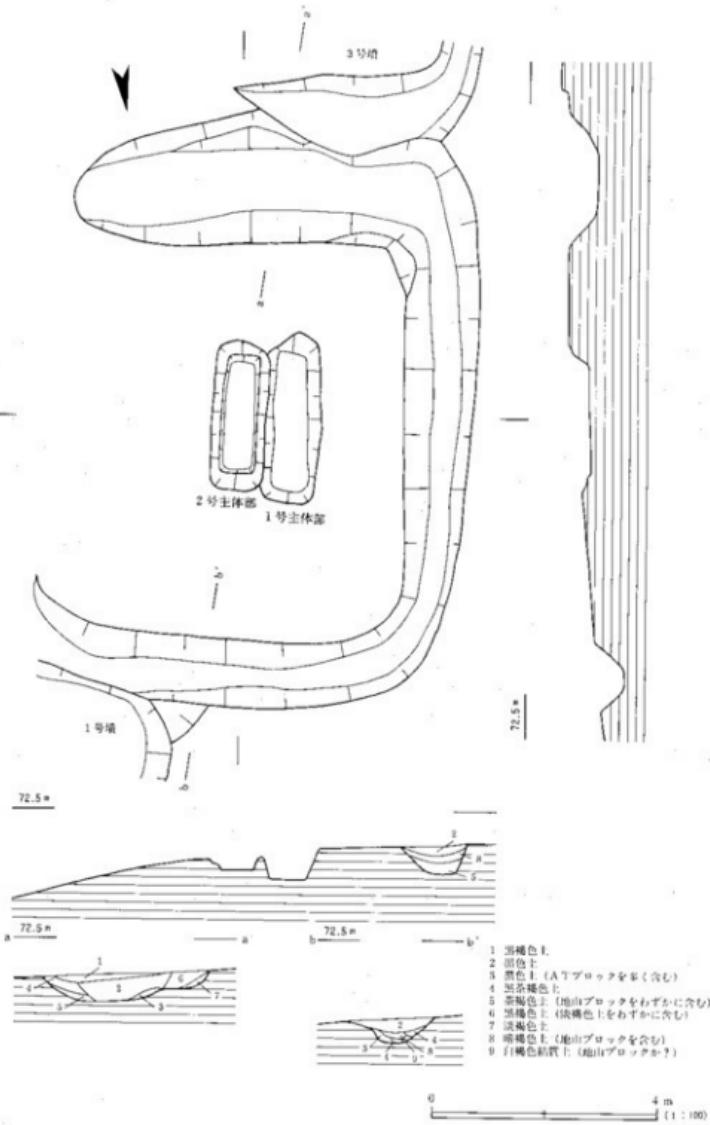
墳丘 調査区北側、標高71~72mの丘陵東側の傾斜変換点に位置する方墳で、1・3号墳と切り合う。調査後の周溝を含めた規模は南北10.7m・東西7.6mを測る。盛土は検出されなかつたが、主体部が削平されていることから築造時にはある程度の盛土が有ったと考えられる。

周溝 斜面の高い側にコの字状に巡る。北端は一部1号墳の周溝によって切られ、南端は3号墳の周溝を切る。幅は0.85~2.35mで西・北側より南側が広くなっている。検出面からの深さは尾根側で最大0.55mを測り、斜面側は徐々に浅くなる。

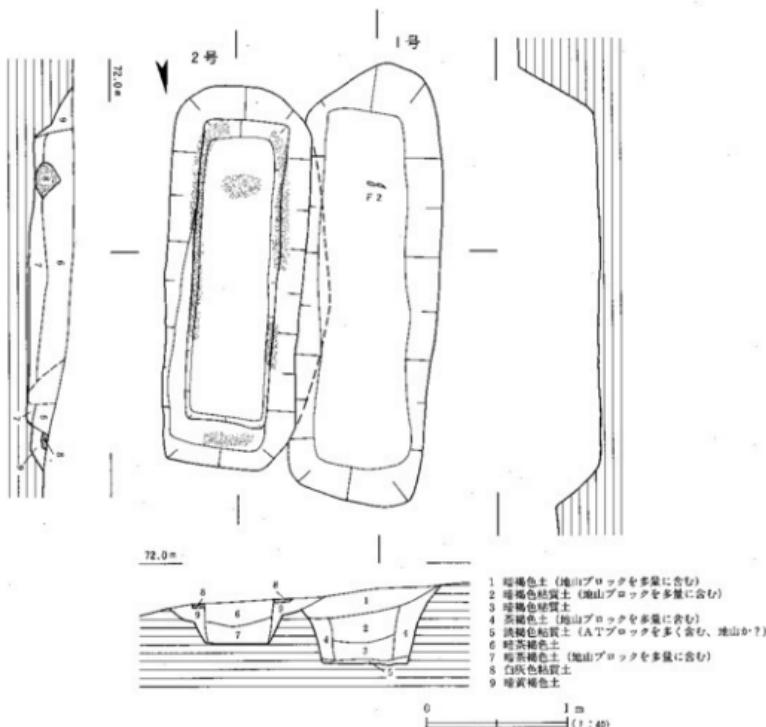
1号主体部 墳丘の中央やや西寄りに位置する土壙墓である。主軸方向はN13°Eで尾根と平行する。平面形はいびつな隅丸長方形で、墓壙掘り方の規模は長さ3.14m・幅0.97m、検出面からの深さは0.54mを測る。土層断面から木棺痕跡が検出されており、幅0.40m程度の木棺を納めていたと推定される。頭位は副葬品の位置から南と推定される。

副葬品は墓壙底南側中央から刀子F2が出土した。検出時は3つに折れており、腹を南、刃先を西に向けていた。

2号主体部 1号主体部の東に位置する土壙墓で、1号主体部を一部切っている。主軸方向はN16°Eでほぼ1号主体部と平行する。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は2段になっており、上段の規模は長さ2.70m・幅1.17m、下段の規模は長さ1.96m・幅0.46mで、検出面からの深さは0.26mを測る。土層断面から木棺痕跡が検出されており、下段の掘り方と合わせて、木棺の規模は長さ1.90m・幅0.40m程度と推定される。検出面で下段の掘り方の外側に沿って検出された白灰色粘質土は蓋と側板を固定するための目張りと考えられる。また、墓壙底南側中央で検出された白灰色粘質土塊は1号主体部の副葬品の出土位置と似ているため、



第16図 2号填造構図



第17図 2号墳1・2号主体部造構図

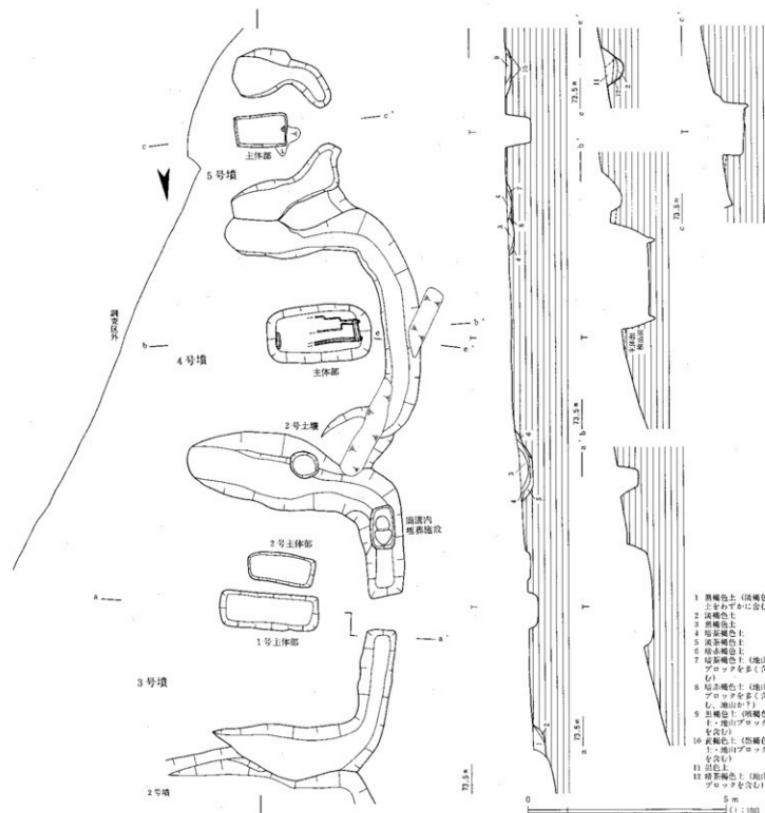
いわゆる粘土枕と考えられる。よって頭位は南と推定される。

副葬品は出土しなかった。

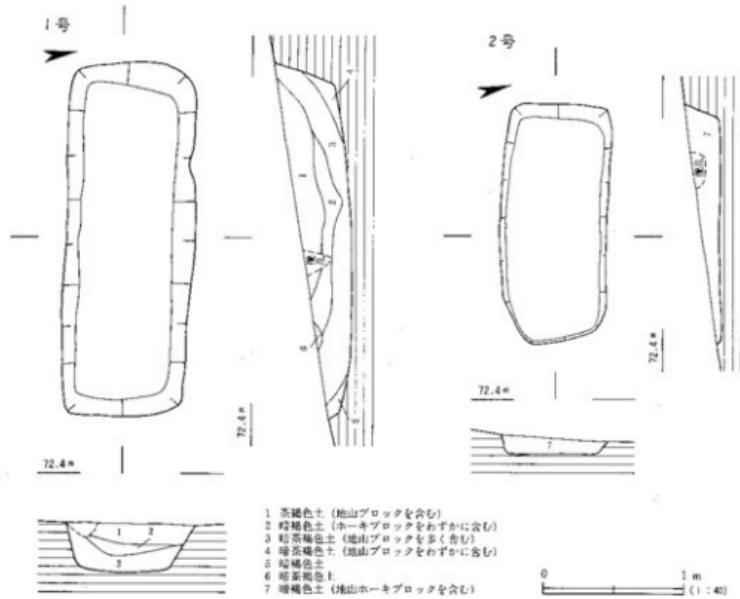
出土遺物 周溝埋土中より直口壺19・甕21・器台23が、表土中より大型壺20・高环22が出土した。なお、直口壺19は他の遺物と時期が異なるので後世の混入とみられる。

### 3号墳

墳丘 調査区北側、標高72~73mの丘陵東側の傾斜変換点に位置する方墳で、2・4号墳と切り合う。調査後の周溝を含めた規模は南北8.65m・東西5.35mを測る。盛土は検出されなかつたが、主体部がかなり削平を受けていることから、築造時にはある程度の盛土が有ったものと考えられる。



第18図 3～5号墳遺構図



第19図 3号墳1・2号主体部遺構図

**周溝** 周溝は斜面の高い側にコの字状に巡り、尾根側の中央を0.85m程陸橋状に掘り残す。北側は2号墳の周溝に切られ、南側は一部地境溝による擾乱を受ける。幅は最大1.90m、陸橋部0.75mを測り、斜面側の方が広くなる。検出面からの深さは尾根側で最大0.48mを測り斜面側は徐々に浅くなっていた。

**1号主体部** 墳丘中央部に位置する土壙墓で、一部地境溝による擾乱を受ける。主軸方向はN79°Wで、尾根に対して直交する。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方の規模は長さ2.52m・幅0.92m、検出面からの深さは最大0.41mを測る。墓壙としては掘り方がかなり浅いので、盛土が流失もししくは削平を受けたと考えられる。平断面とも木棺痕跡は検出されなかった。頭位は墓壙底の傾斜から西側と推定される。

副葬品は出土しなかった。

**2号主体部** 1号主体部の南0.30mに位置する土壙墓で、一部地境溝による擾乱を受ける。主軸方向はN75°Wで、1号主体部とは平行する。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方の規模は長さ1.69m・幅0.75m、検出面からの深さは最大0.23mを測る。1号主体部と比べるとかなり規模が小さいので子供を埋葬したものと考えられる。平断面とも木棺痕跡は検出されなかった。

副葬品は出土しなかった。

**周溝内埋葬施設** 陸橋部の南1.15mの周溝内に位置する土器棺墓である。大型の壺27を棺身、大型の把手付壺26を棺蓋とする合口土器棺で、棺の長さは0.75mであった。長さ1.06m・幅0.58m、周溝底からの深さ0.48mの墓壙掘り方内に、蓋側をやや上に向けた状態で埋置していた。棺身は底部を穿孔した後、高环28の坏部で塞いでいた。棺蓋は同様に底部を穿孔した後、同一個体の高环の脚部片で塞いでいた。また、棺蓋には接地面にも水抜き用の穴が開けられていた。なお、上面の割れは木の根が入っていたため周溝掘り下げ時に壊れたものであり、調査前は完形であったと思われる。

副葬品、人骨等は出土しなかった。

**出土遺物** 周溝内埋葬上面付近より壺24・壺25が出土した。周溝内埋葬に対する供獻土器か墳丘から転落したものかは不明である。その他若干の土器片が出土した。

#### 4号墳

**墳丘** 調査区北側の標高72~73mの丘陵東側の傾斜変換点、古墳群中最高所に位置し、3・5号墳と切り合う。墳形は方墳だが、1~3号墳と比べると辺・角が丸みを持つ。調査後の周溝を含めた規模は南北5.75m・東西4.80mを測る。盛土は検出されておらず、主体部の残りもいいため、築造時からほとんど盛土を持たなかったと考えられる。

**周溝** 周溝は斜面の高い側にコの字状に巡る。北側は3号墳と接し、一部地境溝による擾乱を受けていたため不明瞭であった。南側は一部5号墳の周溝によって切られる。幅は最大1.10m、西側中央部0.95mで、検出面からの深さは最大0.45mを測る。

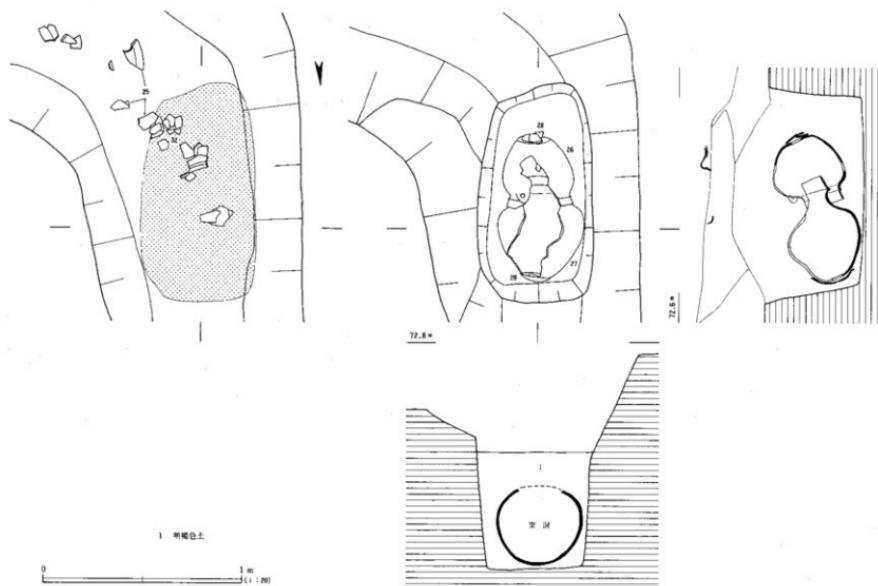
**主体部** 墳丘の中央部に位置する土壙墓である。周溝との距離は0.30m弱しかなく非常に近接している。主軸方向はN90°Wで尾根に対して直交する。平面形は長楕円形で、墓壙掘り方の規模は長さ2.66m・幅1.46m、検出面からの深さは0.68mを測る。墓壙底には両小口に小口板を固定するための溝が掘られており、西側の溝は小口板を立てた後、黄褐色土を裏込めしていた。溝の長さは西側0.56m・東側0.44mを測り、西側の方が長くなっている。溝状の側板痕跡も検出されており、小口板を側板で挟み込むような形の木棺であったと推定される。小口・側板の痕跡と土層断面から推定される木棺の規模は、内法で長さ1.90m・幅0.50mである。南側の側板痕跡は途中から広くなっているが大部分を掘りすぎたため詳細不明である。頭位は小口幅と墓壙底の傾斜から西と推定される。

副葬品は出土しなかった。

**出土遺物** 周溝埋土より、流れ込んだと思われる石謎S4が出土したのみで、古墳に伴う遺物は出土しなかった。

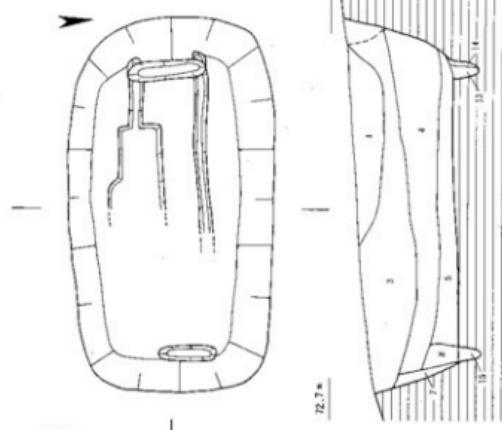
#### 5号墳

**墳丘** 古墳群中最南端、調査区北側の丘陵東側の傾斜変換点に位置し、4号墳と切り合う。2・3号墳のように4号墳と周溝を描えず、やや低位に造られている。墳形は不明瞭であるが方墳と考えられる。調査後の周溝を含めた規模は南北4.30m、東西2.95mを測る。盛土は検

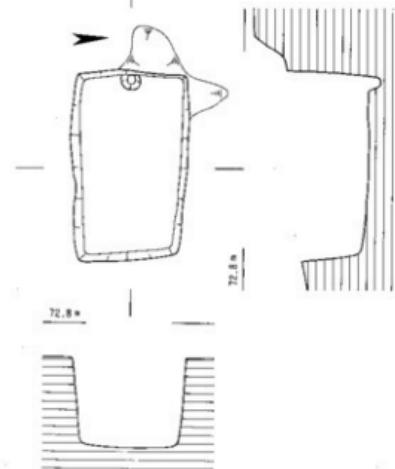


第20圖 3号填埋溝内埋葬施設遺構圖

4号墳



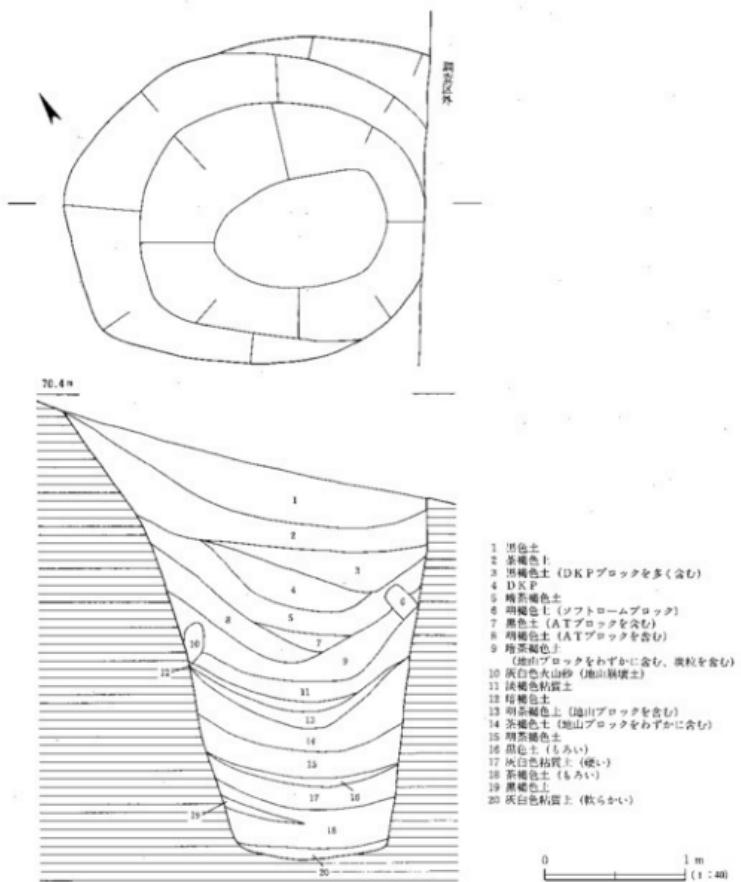
5号墳



- 1 黄褐色土 (地山ブロックを少量含む)
- 2 線模様色土 (地山ブロックを含む)
- 3 墓壁模様色土 (地山ブロックをわずかに含む)
- 4 墓壁模様色土 (地山ブロックをわざかに含む)  
　　(暗褐色土を含む)
- 5 暗灰褐色土 (DK7と暗褐色土の混じり土)
- 6 暗褐色土 (DK5を含む)
- 7 暗褐色土 (DK5を含む)
- 8 線模様色土 (地山ブロックを多く含む)
- 9 墓壁模様色土 (地山ブロックを含む)  
　　(暗褐色土を含む)
- 10 黄褐色土 (地山ブロックを少量含む)
- 11 線模様色土 (地山ブロックを多く含む)
- 12 暗黄褐色土 (より多い)
- 13 墓壁模様色土
- 14 深灰褐色土
- 15 墓壁模様色土粘質土

0 1 m  
(1 : 40)

第21図 4・5号墳主体部造構図

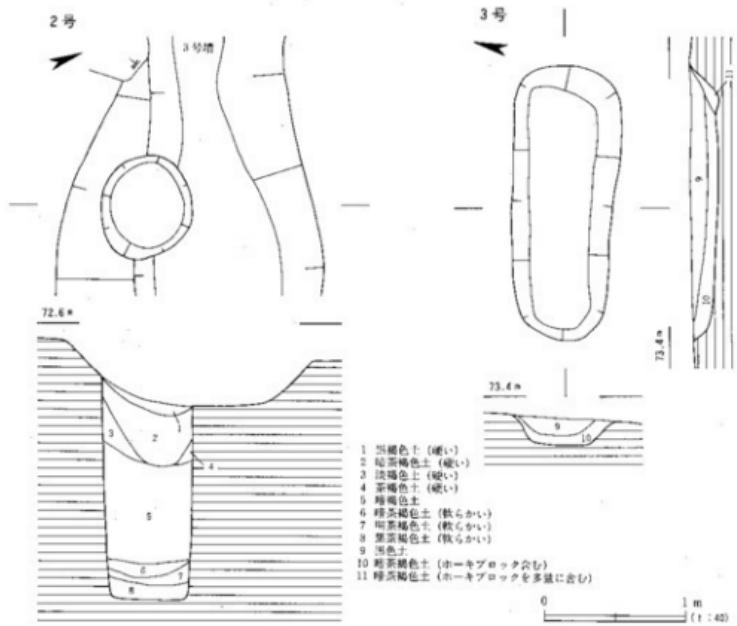


第22図 1号土壤造構図

出されておらず、主体部の残りもいいため築造時からほとんど盛土を持たなかつたと考えられる。

**周溝** 周溝は斜面の高い側にコの字状に巡り、尾根側中央を陸橋状に掘り残す。北側は4号墳の周溝をわずかに切っている。幅は最大1.05m、陸橋部0.55mで、斜面の方が広くなっていた。検出面からの深さは0.10m~0.15m程で非常に浅い。

**主体部** 墳丘中央に位置する土塙墓で、北西肩部が根による搅乱を受ける。主軸方向はN86°Wで、尾根に対して直交する。平面形は方形で、墓塙掘り方の規模は長さ1.34m・西小口幅0.80



第23図 2・3号土壤構造図

m・東小口幅0.74m、検出面からの深さは0.66mを測る。墓壙底西辺中央に径0.14m・深さ0.10mの小ピットを持つ。木棺痕跡は平断面とも検出されなかった。頭位は小口幅の違いから西と推定される。

副葬品は出土しなかった。

出土遺物 主体部検出面より大型壺29・高环31、南側周溝より甕30が出土した。当初壺29は5号墳の主体部としての土器棺と考えていたが、下から本物の主体部が検出されたので主体部に対する供獻土器であろう。

### (3) 土壙

3基の土壤を検出した。3基は形態・規模の点で大きな差が有り、性格も異なると推定される。

**1号土壙** 調査区北側東斜面、2号墳南側周溝の延長線上に位置し、一部調査区外にかかる。平面形は円形で、掘り方の規模は長軸2.56m・短軸2.30m、検出面からの深さは尾根側で3.20mを測る。地山の土層を観察すると上層部は軟質・褐色系の火山灰層であるが半ば過ぎから硬質・灰色系の火山砂層に変わり、埋土にもこれが崩落したもののが含まれるようになる

(10・17・20層)。

遺物は17・18層の境界付近から土師器体部32・高环坏部片が出土した。性格は不明だが、同時期の遺構である古墳群との関係から、1号墳主体部や2号墳2号主体部で使用された粘土の採掘場の可能性がある。

**2号土壙** 調査区北側丘陵東側の傾斜変換点、3号墳の南側周溝内に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸0.72m・短軸0.64m、深さは周溝底から1.42m、周溝検出面からは1.80m程度になる。

遺物は出土しなかった。性格は、底部に杭穴状のものが検出されなかったので断定を避けるが、埋土の縮まり具合や周辺から縄文土器片・石鏃が出土していることから縄文時代の落し穴と推定される。

**3号土壙** 調査区南側の東緩斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.96m・短軸0.72m、検出面からの深さは0.20mを測る。当初平面形から土壙墓の一つと考えていたが、埋土が黒色土の自然堆積であったため性格不明の土壙とした。

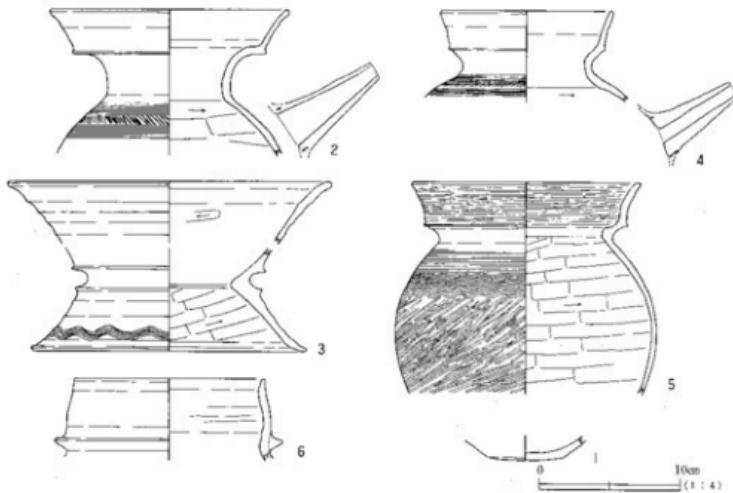
遺物は出土しなかった。

## 2. 遺物

### 土壙墓群

[注記( )は推定値]

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	地土・焼成・色調・遺存状態
3号土壙墓 埋土	1	直 口 部	直径(5.3)	縦の丸い平底。	外縁へラミカギ後ナヂ。内面ヘラケグリ後ナヂ。	粘土。 焼成良好。 堆積褐色。内面灰化物付着。 底部1/2。
5号土壙墓 上面	2	注 口 土 基	口径(16.0) 注口長 7.5 注口先径 0.9	口縁部は強く外反する複合口跡で 口縁端部は小さく内折する。縦曲部 はほとんど縮減しているが、長く 伸びるものではない。肩部は細く しまって長い。肩部に物語工具によ る粗かく目の深い平行線刻を2 条施し、同時に同一工具による刻み 目を密にめぐらす。注口部分の裏 面は角度不明。薄手。	口縫部内外面ヨコナヂ。肩部内面 右方向の丁寧なヘラケグリで単位 不明瞭。 注口部外側ハメ調整、壁による 成形とみられ、内面の調整単位は 観察できない。	1~3mm大の砂粒。1mm以下の 礫砂を比較的多量に含む。 焼成不良。もろい。 堆積白色。 口縫部1/3、瓶部2/3、肩部1/8、 注口部ほぼ完存。
	3	直 口 部	口径 22.6 脚径 19.0 脚高(11.7)	外観気味に大きく聞く上台部で、 端部は丸い。肩部は上台部より 小さく、端部でさらには仄度を失 たくおわる。肩曲部の径は細い。 脚部下位に相振放状文様をめぐ らす。	口縫部内外面ヨコナヂ。上台 部外側ヨコナヂの単位明顯。内面 右方向のヘラケグリ後ナヂ仕上げ。 脚部内外面強烈ヨコナヂ。肩部 外側ヨコナヂ、内面右上方の ヘラケグリ。	1~2mm大の砂粒を比較的多量 に含む。 焼成ややあまい。 堆積褐色。 上台部2/3、脚部完存。
6号土壙墓 上面	4	注 口 土 基	口径(12.0) 注口長 6.1 注口先径 0.8	口縫部は外反する複合口跡で、口 縫端部は丸い。縦曲部の内面の径 は不明瞭。肩部の径は縮減して いるが小さい。肩部は比較的細い。 肩部に物語工具による粗かく深い 平行線刻を2条施し、同時に同一工 具による細かい目を密にめぐらす。 注口部分の取扱い角度不明。	口縫部内外面ヨコナヂ、外面凹凸 部附近に断続沈線状の擦痕が残る。 肩部内面右方向のヘラケグリ。注 口部外面ナテ調略。棒状工具を差 し込んだままの成形で基部は厚い。 口縫部1/4、肩部1/3、注口部は 完存。	2mm大の砂粒を少量含む。 焼成あまり。 堆積褐色。注口部下部及び脚部 底面に保有者。 口縫部1/4、肩部1/3、注口部は 完存。



第24図 3~6号土壙墓出土遺物図

(法量( )は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・遺存状態
6号土壙蓋 上面	5	甌	口径(16.0) 最大胴径(18.4)	口縁部は外反する複合口縁で、口縫部は丸い。腹曲部は複数の段をなし、尻曲部の縫は小さく突出する。体部は厚く強筋ない印象。肩部外縁には貝殻埋込みによる平行線模-波状文様を施す。	口縫部内外面施磨方向のヘラミガキ。口縫部外面には櫛目状線模の擦痕を残す。肩部外縁ヨコナギ。体部外縁先端の斜め方向のヘラミガキ。内縫右方向のヘラケズリ。	1~2mmの大砂粒を多量に含む。焼成良好。底一部墨斑。口縫部1/2。
5・6号 土壙蓋上面	6	甌	口径(13.4)	内湾する長い口縫部で、縫部は上方に立ってよくおわる。腹部とその境界に断面三角形の文様を點黏する。	口縫部内外面ヨコナギ。口縫部内面の豊唇は粗く、腹縫部後の柔軟がある。	1mmの大砂粒を少量含む。露母のびう。焼成普通。底皮膚色。淡黄褐色。口縫部1/8。
1号謹 墓土上層	7	甌	口径(15.8)	口縫部は短く内湾する複合口縁で、縫部は肉厚。肩部の縫は縫方向に細長くのびる。縫部は強く外反して上方に窪む。	口縫部内外面ヨコナギ。口縫部内面ヨコナギ2重縫。縫部外縁ヨコナギ。肩部外縁右方向のヘラケズリ。	2~3mmの大砂粒を比較的多量に含む。焼成ややあまい。淡黄褐色。口縫部1/4。
1号謹 石の上	8	甌	口径 14.6 最大胴径 22.8 底径 3.6 基高 29.0	口縫部は短く直立する複合口縁で、縫部は外側にやや膨らむ。9は内側に肥厚するが一様でない。ともに尻曲部の縫は縫方向に左く伸びる。体部は質の張る印象的で、底部は縫の丸い平底。肩部に8は貝殻埋込みによる波状文様とその下に剥み目がめぐり、9も貝殻埋込み。	口縫部内外面ヨコナギ2重縫。口縫部外縁に櫛目状線模の擦痕ある。外縫部-肩部縫方向に、肩部下半身は非常に細かい其の縫方向のヘケメ調整で一際低い口縫である。9は豊唇方向のヘケメ調整のちナギ。内面ヨコナギで、基底部も平底でない。体部右上方のヘラケズリで、8の底部附近はヘラケズリでの指揮圧痕を残す。	1~2mmの大砂粒を少量含む。焼成普通かややあまい。淡黄褐色。ほぼ完形。
	9	甌	口径 15.5 最大胴径 26.5 底径 5.7 基高 30.9	による波状文様から平行機縫を一連に施す。9は底部焼成後の穿孔(7×5.5)で一方に片寄る。	9は豊唇方向のヘケメ調整のちナギ。内面ヨコナギで、基底部も平底でない。体部右上方のヘラケズリで、8の底部附近はヘラケズリでの指揮圧痕を残す。	1~3mmの大砂粒を比較的多量に含む。焼成普通かややあまい。体部右上方に削痕等で底部まで削除。淡黄褐色-淡棕褐色。ほぼ完形。

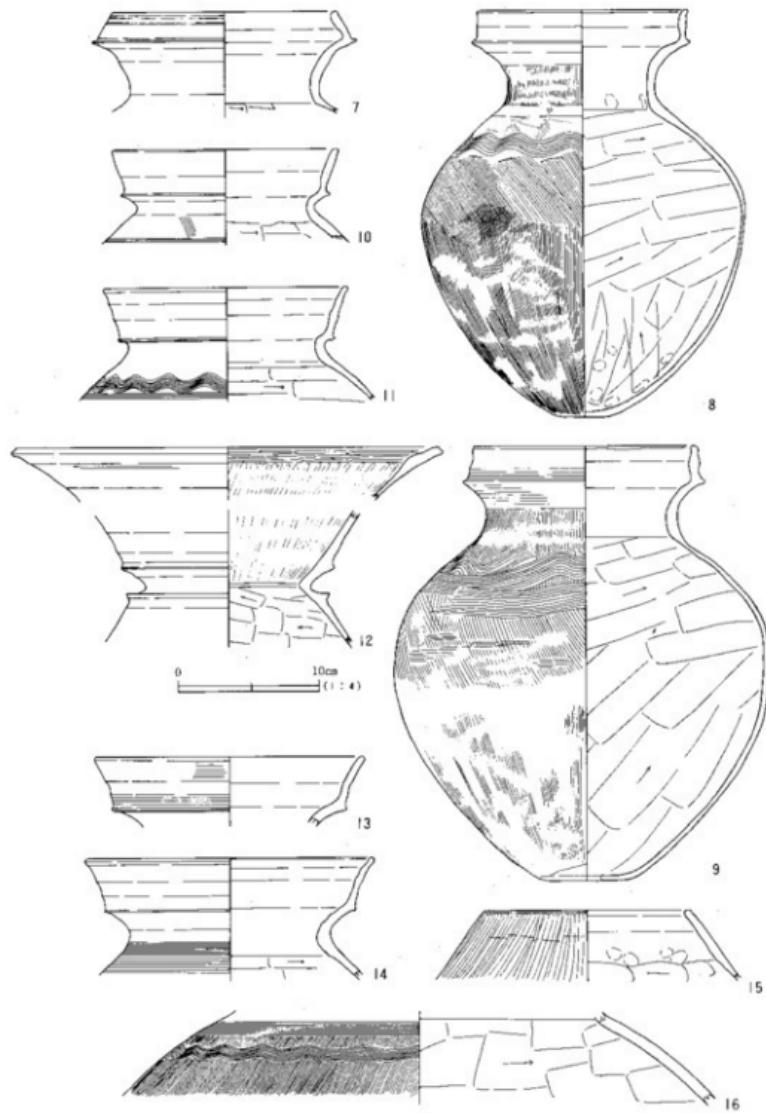
(注釈( )は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	黏土・焼成・色調・造作状態
1号墳 埋土上層	10	盤	口徑(15.4)	口縁部は外側する複合口縁で、端部10は内側り、11は丸い。頭曲部の稜は低い。肩部に只見復縁による平行縦ないし波状文帯がめぐる。	口縁部内外面ヨコナギ、10は2重位。ともに口縁部外周に櫛縞沈模状の擦痕残る。両部外面ナデ、内面右方向のヘラケズリ。	精良。苦得めだつ。 焼成良好。 灰褐色。 口縁一部脚部1/6。
	11		口徑(17.0)			1 mmの大砂粒少量。1 mm以下の細砂粒比較的多量に含む。 焼成良好。硬質。 暗褐色。 口縁一部脚部1/3。
1号墳 埋土上層及 び下層調査 T2	12	盤 基 台	口径(14.8)	ゆるやかに大きく外反する上部部で端部は先端って倒置をなす。頭部角部の稜は低い。接合しないが同一個体の跡覆部は内張る。	口縁部外面ヨコナギ、外面に櫛縞沈模状の擦痕残る。内面施錠構方向のヘラミガキ、上部部ヘラミガキのみのナデ。脚部左方方向のヘラケズリ。	3 mm以下の砂粒を多量に含む。 焼成良好。 灰褐色。 口縁部2/3、脚部1/3。
2号墳 埋土上層	13	盤	口徑(18.0)	口縁部は外側する複合口縁で、端部は丸い。頭部の稜は小さく外下方に突出する。14は肩部に櫛縞平行縦帶がめぐる。	口縁部内外面ヨコナギ、13は外面櫛縞沈模状の擦痕全体に擦痕に残る。14はヨコナギ3重位の凹線になっている。肩部内面右方向のヘラケズリ。	1 mmの大砂粒をわずかに含む。 苦得めだつ。 焼成普通かややましい。 灰褐色。 口縁部1/2。
2号墳 西面埋土	14		口徑(20.0)			1~2 mmの大砂粒を少量含む。 焼成あまり。 灰褐色。 口縁一部1/3。
2号墳 埋土上層	15	古付碗	口徑(14.0)	内張する口縁部。ワイングラス状の底に古がつる巣形。口縁部丸く外側がやや膨らむ。大型。	口縁部外表面右方向のヘラミガキ、上部にハケメ縫の痕が残る。内面ヨコナギ、下位左方向のヘラケズリ。	1 mm以下の細砂粒を多量に含む。 焼成良好。 淡青白褐色。 口縁部1/16。
1号墳 2号墳 3号墳 埋土上層	16	大型壺		口縁部不明。類形直下底残。肩部上位に貝殻覆飾による平行復縁と波状文帯を施文する。	体外面青面青に細かい目立たぬ方向のハケメ、内面右方向のヘラケズリ。	2 mm以下の砂粒を比較的多量に含む。 焼成良好。硬質。 淡青褐色。 肩部1/10。

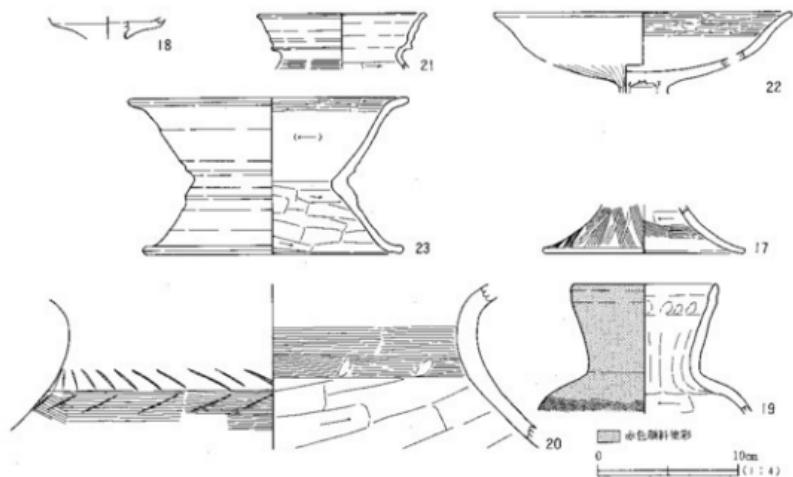
## 古墳群

(注釈( )は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 態	手 法	黏土・焼成・色調・造作状態
1号墳 開溝埋土	17	高 环	脚径(14.0)	脚部破片。ゆるやかに聞く脚部で端部小さく角張る。薄手。	外表面ハケメ調整のち謙なヘラミガキ。内面脚部左方向のヘラケズリ、底部横方向のハケメのち下位ナデでハケメ軌跡を残す。	2 mmの大砂粒を少量含む。系色粒子を含む。 焼成良好。 灰褐色。 脚部1/6。
1号墳 表土	18	小 菓 台		受創破片。上方にのびる口縁部が付くもの。脚部との接合は内板充填式。やや厚手。	受創外縁端、内面ヘラミガキのみナデ。	2 mmの大砂粒を少量含む。 焼成普通。 くすんだ淡青褐色。 受部1/6。
2号墳 開溝埋土	19	灰口壺	口徑 10.0	口縁部は最も外側し、肩の張る環形の体部。	口縁部内外面強いヨコナギ、下位に施錠状痕ぐる。底部外表面斜め方向のハケメのち上位ナデ、内面左方向のヘラケズリ。	1~2 mmの大砂粒を比較的多量に含む。 焼成良好。 淡青褐色。外底青色斑状剥離。 口縁部2/3、肩部1/4。



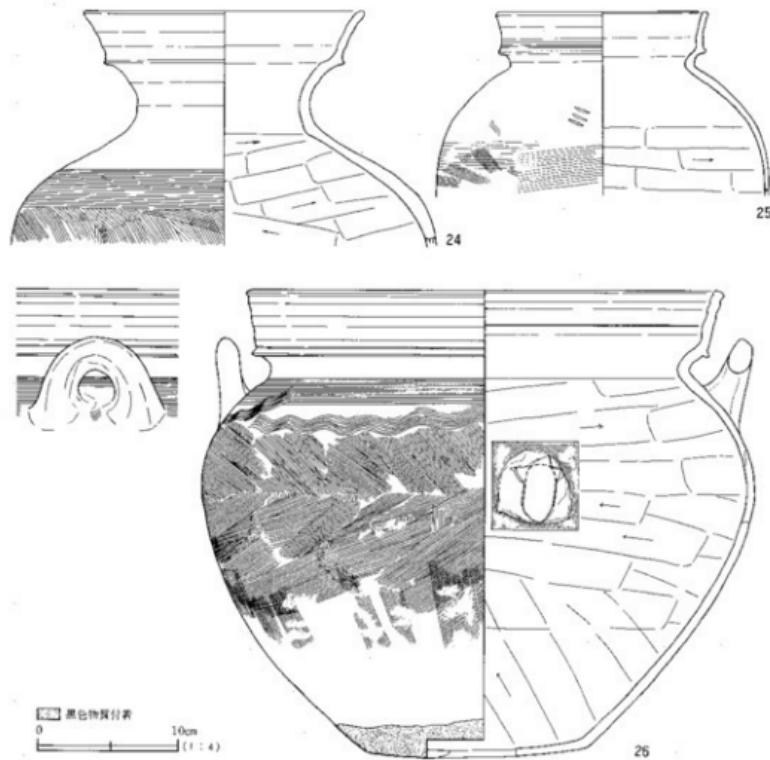
第25圖 1~3號溝出土遺物圖



第26図 1・2号墳出土遺物図

(括弧( )は推定値)

出土位置	No.	器種	径径(cm)	形態	寸法	陸土・焼成・色調・遺存状態
2号墳 表土	20	大型甌		大型甌の壺。口縁端部横片は外反し角張っておわるもの。瓶部下位に木口鋸工具による継ぐ浅い斜み目を施す。	瓶部外面ナデ、内面横面部後横方向の細かい目(ハケメ)跡認。瓶部下面横方向のハケメ、内面右上方向のヘラケズリ。	2~3mmの大砂粒を比較的多量に含む。茶褐色だつ。 焼成度適かややあまい。 淡黄褐色。断面黒灰色。 瓶部1/12。
2号墳 周邊埋土下層	21	小型甌	口径(11.6)	口縁部は強く外反する複合口縁。底部は外側に丸い。周邊部の縫は長く外下方にのびる。	口縁部内外面ヨコナデ3單位。肩部外側ハケメ、内面右上方向のヘラケズリ。	1mm大の砂粒を含む。 焼成度ややあまい。 淡褐色。 口径部2/3。
2号墳 表土	22	高 瓶	口径(20.0)	口縁部は丸味をもつ。口縁部で外反して聞く。瓶部は丸い。瓶底部外側小円孔を穿つが孔中尖先は突出する。	口縁部外側ヘラミガキと思われるが単位不明。内面横方面のヘラミガキのちナデ。ヘラケズリ痕残す。瓶底部外側ヘラケズリのち横方面のヘラミガキ、円柱状塊のちナデて飴み、その後小円孔。内面ヘラミガキのちナデ仕上げ。	2mm以下の砂粒を比較的多量に含む。 焼成度好。理質。 淡黄褐色。 口縁部1/16、瓶底部完存。
2号墳 周邊	23	放 瓶 器 古 基高	口径 18.8 脚径 18.0 基高 11.3	やや小型。上台と脚台の大きさに差がない。口縁端部・脚部膨脹部とも外方に折れて横にのびる。瓶部は強いヨコナデにより瓶をつくるが優いものではない。器面は粗雑で歪つかんじ。	口縁端部内外面ヨコナデ。口縁部内面横方向のヘラミガキ。上台部内面ヘラミガキのちナデ仕上げ。單位不明。脚部内外面ヨコナデ。脚台部内面右方向のヘラケズリ。	1~2mm大の砂粒を比較的多量に含む。1mm以下の細砂粒を多量に含む。 焼成度普通。 淡黄褐色。 上台部1/4、脚台部3/4。



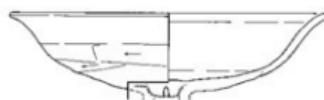
第27図 3号墳出土遺物図1

(括弧( )は推定値)

出土位置	No.	形種	法長(cm)	形 態	予 法	粉土・焼成・色調・蓋存状態
3号墳 周溝	24	壺	口径 19.4 最大廣径 23.5	口縁部は強く外反する複合口縁で 端部は丸い。肩部の後は小さく 突出する。腹部は漸くしまり、肩 の張りは強い。やや厚手。	口縁部外面ヨコナダ、ヨコナダ の上半部小窪窓。外面肩部横方向 のハケメ、肩部斜め方向のハケメ、 ハケメは粗い目で粗糙。内面肩部 右方向へのハラケズリ。	1~2mm大的砂粒をわずかに含む。 1mm以下の細砂粒を多量に含む。 焼成普通。 淡灰褐色。口縁部一部黒度有り。 口縫~頂部4/5、肩部2/3。
	25	壺	口径(14.6) 最大廣径 23.5	口縁部は直立気味に外反する複合 口縁で、端部はやや角張る。肩部 の跡は水平方向に突出する。肩 部外縁に木工工具による刺み目 が3本ある。	口縁部外面ヨコナダ 2 単位。恩 部上面に椭円状焼成斑紋の稍かしい模 様が残る。体部外縁部~斜め方向 のハケメ調整のち肩部ナタ仕上げ。 内面右方向へのハラケズリのち肩部 下部なだす。	1mm大的砂粒をわずかに含む。 1mm以下の細砂粒を比較的多量に含む。 焼成普通。 淡灰褐色。 口縫部3/5、肩部1/2。

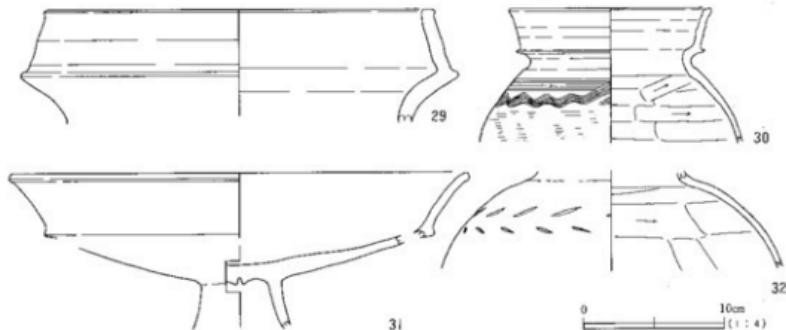
## 〔法整（ ）〕は推定値

底面位置	No.	器種	法量(cm)	形 貌	手 法	胎土・焼成・色調・遺存状態
3号墳 雨瀬内性格 施設 植葉	26	把手付 壺	口径 32.8 最大直径 39.0 底径 15.7 器高 33.3	口縁部は外側する複合口縁で、基部は外側に面をなして丸く膨らむをもつ。底面部の後は下方方に奥くのびる。体部は最大直径部位が高位にあり、底盤より既復縁による複合平行縁帯と波状文帶がめぐる。底部は縁の先い大きな平底。肩部の対する位置に底盤の把手が上向きにつく。既復縁の穿孔が柄部と底部に施される。	口縁部内外面ヨコナデ。内面底部に2重込みがはしる。外面部左上方から約のカケメ、体部下半端方向のハケメのち斜割底方向の斜カケメ、ハケメは非常に細かい日。底部周辺は磨減のため調整不明。内面部下半左方向、上半右方向のヘラケズリ。 把手は既復縁上に焼成状態を差し込んで露着し、接合部の土わりに糊上を被覆する。その後もとの集文を重なるように把手の左右両側に平行施設と波状文帶を重ねてうまくつけている。	1mmの大砂粒少量含む。1mm以下の細砂粒を多量に含む。 焼成ややあまい。 淡青黄褐色。 完剥。 底部外周、高底环部の合わせていた部分が思案でいる。植葉の底跡の既復縁がある。
桿身	27	大型壺	口径 23.5 最大直径 43.8 底径 13.7 器高 50.9	口縁部は内傾し、腹部はやや角張る。底部の腹は厚く突出する。腹部は唇面に比べて細く、体部は肩の張る削肩形。底部は焼け丸い大きさの平底をもつ。肩部既復縁による平行施設を施す。波状文帶をもたらす後最後に平行施設に重ねている。底部既復縁の穿孔約11×19mm。	口縁部内外面ヨコナデ。外面部左肩部上から下への縱方向のハケメのち施文のたなびけ消し。体部下部非常に細い日の縱方向のハケメ後、下辺はテテ消して上げる。肩部に幅広のハケメが同じ高さに認められる。内面部既復縫から右方向のヘラケズリ。	2mmの大砂粒を少量含む。 焼成ややあまい。 質黄色。植葉かぶさっていた部分は褐色に変色している。 完剥。
棺桶孔部 被覆土器	28	高 环	口径 22.0 脚径 14.0	口縁部は丸味をもち、口縁部でゆるむかに外反する。口縁部はカットされ小さく角張る。底部の接合部は既復縁式で、底面部内面の脚部分は凹む。底面部外小円孔穿つ。底部はゆるやかに外方へ膨き、脚部はカットされ縦縫をもつ。全体のつくりは複雑で表面が滑れない。	口縁部内外面ヨコナデ。环部外縫部に逆連斜耳わりのヘラケズリ様の痕残る、内面ヘラミガキのうちにナゲ仕上げと思われるが単位不明。脚部外表面ナデ、ヘラミガキの有無不明。	1mmの大砂粒を少量含む。1mm以下の細砂粒を比較的多量に含む。 焼成不良。 淡青白褐色。 环部完剥、脚部4/5。
5号墳 雨瀬陶土	29	大型壺	口径(27.2)	口縁部は内傾し、腹部は平面画をして外側に把持する。肩部の縁は水平方向に張くのに、同一個体の碗では底部下位に木口板工具による羽状文、肩部には深い飾縫と施文で内側に筋目を2段交互に施文している。同一個体の底部は縁の先い大きな平底を呈し、底盤中央は既復縁の穿孔の可能性がある。口縁部の形状は厚いが、底部破片は薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外縫部に細かい日の縱方向のハケメ調整。肩部内面左方向のヘラケズリ。	1~2mmの大砂粒を比較的多量に含む。 焼成ややあまい。 淡青黄褐色。 口縫部1/12、底盤ほぼ完存。体部破片全体の約1/10。
5号墳 雨瀬埋土	30	甕	口径 14.0	口縁部は外傾し、端部は内側に面をなして膨む。底部の後は細い。底部既復縁平行縁帯と波状文を施す。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外縫方向のハケメ、内面右方向のヘラケズリ。	2mmの大砂粒を比較的多量に含む。系色粒子を含む。 焼成不良。 質黄色。 口縫部1/2。
5号墳 雨瀬	31	高 环	口径 32.1	被をもつ大型の高环。口縁部は外反して縁部は外側に丸くおわる。脚部無い。	施設して調整不明。环底部内面へラミがき角ナグ。脚部との接合は円板充填式で、その後にナグが施されている。	粗砂粒を多量に含む。 焼成不良。 質黄色。 口縫部1/6、环部一側部上半生存。



0 10cm (1 : 4)

第28図 3号墳出土遺物図2



第29図 5号墳・1号土塼墓出土遺物図

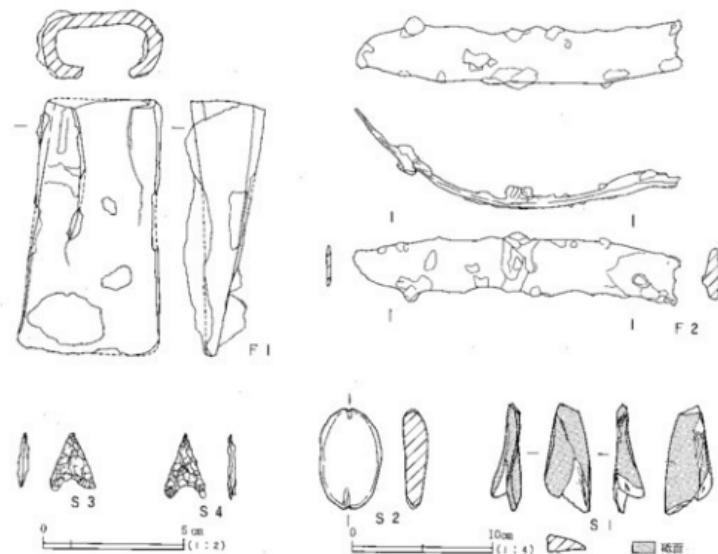
## 土壤

[法量( )は推定値]

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形 想	手 法	粒土・焼灰・色調・遺存状態
1号土塼	32	便		円筒形。木口鉄工具による跡状を有す。	外表面圓、内面右方向へのラケスリ。	1~2mm大の砂粒を少量含む。 焼成器。 純粹褐色。 質地1/10。

## 鉄器・石器

出 土 位 置	No.	種 類	大きさ(cm)	特 徴
1号墳	F 1	鐵 刃	全長 9.1 刀幅 5.1 厚さ 2.7	袋部は横円形で内径3.3×1.8cm。刃部は右形剝離。
2号墳	F 2	鐵製刀子	残存長 11.5	板状で非常に薄い。刃部完存し茎部欠損。闊は不明。刃部中央で折れ曲がる。
2号主体部			刀幅 1.7 厚さ 0.2	
土壤益群 1号溝東 上層埋土	S 1	鐵 砥	残存長 7.6 最大幅 3.2 最大厚 2.1	二つに割れ、両端を欠損していたが、ほぼ形を留めている。表面三角形狀で側面は2面。逆に最も表面を認める。2面は大変良く研磨され、側面には擦痕が残る。下削面にも擦痕がある。
土壤益群 5・6号土塼墓 上層埋土	S 2	石 砥	全長 7.0 最大幅 4.3 最大厚 1.7	扁平な右の両端部を両面より切り込む。表面滑らかで光沢をもつ。重量49g。



第30図 鉄器・石器遺物図

### 石器計測表

出土位置	No.	種類	基部形	基部の根部調整	調整	整形	中央断面形	欠損部	尖端	長さ	幅	厚さ	重	石材
1号墓跡 1号土壇部 底部	S 3	石鏃	極凹	薄内	両面	非扁	菱形	尖端部 脚部	○	19.0	16.0	3.5	600	安山岩質
4号墳 周辺SW区 上層埋土	S 4	石鏃	極凹	厚内	両面	非扁	平凸	脚端部	○	22.5	14.9	3.0	550	碧玉質

略号及び用語解説

#### 1. 基部形

極凹形：凹み部の長さに対してその深さが9分の1より大きくなるもの

凹形：凹み部の長さに対してその深さが9分の1から20分の1のもの

直底形：凹み部及び突出部の縁に対して、その深さもしくは高さが2分の1以下のもの

#### 2. 網目調整

青背：背面側面部調整 邪肉：厚形両面側面部調整

厚肉：厚形両面側面部調整 平形側面部調整：打撃角が95度以下

薄形側面部調整：打撃角が95度以上 薄形側面部調整：打撃角が

25~50度 厚形側面部調整：打撃角が55~70度

#### 3. 調整

両面：両面側面部調整 片面：片面側面部調整

#### 4. 整形

非扁：非形及び菱形側面部調整による整形

#### 5. 尖端

○：特に鋭い ○：鋭い ×：鋭くない

6. (数字)：後端部の大きさ。東を示す

7. 石材は肉眼による鑑別

土器はできる限り図化をはかった。土壙墓群出土土器の器種構成をみると、注口土器・壺・大型壺・甕・鼓形器台・台付壺がある。図化できなかったものでは大型高環部片と注口土器2個体がある。注口土器については4個体はあったことになり、5号土壙墓と6号土壙墓で1個体ずつ出土していることから、一般的な器種ではないだけに注意される。

壺甕類のうち6号土壙墓棺上出土甕5は、口縁部のヨコナデ成形の明らかな外反の強い複合口縁であるが口縁部・体部ともに調整はヘラミガキである。肩部の文様も多条で振幅の小さい古式の波状文であり、土井編年の上種第5貯蔵穴7号・住居址27号期に比定される。甕底部1も同型式で、当遺跡では1・5より古いものは出土していない。

全形を知りうる1号溝出土壺8・9は、口縁部ヨコナデの単位はまだ2単位で、肩部には振幅の長い波状文を施し、体部は縱方向主体のハケメ調整で底部は平底を留めている。8は口縁部が直立し底部は尖り気味と形態変化があり、肩部に体部下半とは別の粗い目のハケメを左上方方向から施している点で、一括造物ながら後出的特徴をもっている。擲塚第2号貯蔵穴期に比定される。その他の壺甕類の口縁部も口縁部外面に櫛描沈線状痕を残し、東高江2号貯蔵穴～擲塚第2号貯蔵穴期におさまるものである。

古墳群出土土器について遺存していたものの器種構成をみると次のようになる。

1号墳：大型壺・高环・小型器台

2号墳：大型壺・甕・高环・鼓形器台

3号墳：壺・甕

3号墳土器棺墓：大型壺・把手付甕・高环

4号墳：甕

5号墳：大型壺・甕・高环

土壙墓群も含めて4号墳以外のどの古墳も大型壺を伴っていることは供獻土器か棺使用かは別として葬送儀礼を考えるうえで興味深い。以下、特徴的な個々の遺物の時期について説明を加えたい。

1号墳出土土器には小片ながら小型器台受部18があった。器形・胎土からみて搬入品ではない。小型三種土器を受容後に当地で作成したものであり、受部と脚部との接合がすでに円板充填式へと形態変化しており、宮ノ下4・6号住居址期以降と考えられる。2号墳出土鼓形器台23は上台部端部・脚端部とともに外方に折れてはいるが、端部は角張らず丸く終わっている。筒部径は太く、上下の稜は突出しないで粗雑なつくりとなっている。これらを定形化前の古い要素とみた。少なくとも擲塚第5号住居址期よりも古い。3号墳土器棺墓の26・27は、大型厚手で大きな平底を残している。未だ棺専用の特徴が顕著ではなく、体部は最大胴径位の高い比較的薄手に仕上げている。27は体部縱方向のハケメ、26は肩部に左斜め方向のハケメが施されることから、宮ノ下4・6号住居址期に併行すると考えられる。肩部の施文は櫛描平行線と波状文であるが、5号墳29は平行線に羽状文、2号墳20は羽状文と新しい

文様構成へと変化しさらに大型化している。大型で浅い高環は宮ノ下4・6号住居址期ではヘラミガキ調整を主とする。28は环底部が平坦で器形的には新しいが、ヘラミガキが不明瞭で环底部と口縁部の境に粘土の接合痕が残り、外面にヘラケズリ痕跡を認めるといった粗いつくりである。これらは古い要素の可能性もあるが、脚部のゆるやかな広がりから一応、宮ノ下4・6号住居址期を考えた。2号墳高環22は3号墳28と大きさ・形とも差異はない。ところが、柱状部内面の凹板充填後のナテ調整が22・31で認められた。この時期に特有の技法であるのか地域性によるものか検討を要するものである。

註 土井珠美 「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986年

## IV 鑑 定

### ニタ子塚遺跡1号墳周溝内埋葬施設より検出されたウシの骨について

鳥取大学医学部解剖学第2講座

井 上 貴 央

#### 1. はじめに

倉吉市ニタ子塚遺跡の古墳群からは、1～5号墳の5基の古墳が検出されている。このうち、1号墳は最も大きい方墳で4世紀前半代のものと考えられているが、この古墳の周溝より獸骨が検出された。獸骨は鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝助教授を経て筆者に同定を依頼されたものであって、筆者自身現地で確認したわけではない。一部の骨は図面に描かれて実測されていたが、一括して取り上げられた骨や歯も多数あった。検出した骨は形態からウシの骨と同定した。

鳥取県内で古墳の周溝から動物の骨が検出された例としては長瀬高浜遺跡7号墳のウマ、同遺跡24号墳のウシの例があるが、類例は多くない。本稿ではその重要性にかんがみ、検出骨の記載を中心に同定結果について述べる。

#### 2. 検出状況と検出骨

1号墳の北西側の周溝より検出されたものであるが、ウシの骨を埋葬した時の掘り方は明らかではない。検出時の図面をみると頭蓋は主体部の長軸方向と直角な方向に前後をむけて上顎・下顎が鉗合状態で検出されている。後の検討結果からこの顎骨は左側のものであることが明らかになったが、図面に描かれていない左側の歯牙も検出されている。また、右側の下顎骨及び下顎歯は一括取り上げされたものの中に含まれていた。検出された骨は何れも頭部のものであって、椎骨、肋骨、骨盤、四肢骨は検出されていない。

図面に描かれていた鉗合状態にある骨は左側上顎と左下顎骨であって、歯は舌側面を上に向かって状態で検出されていたことが確認できた。したがって、一括取り上げられた右側の歯

牙は図面より高い位置から検出されたものと思われる。

検出された左側下顎歯は、第1～第3前臼歯と第1～第3後臼歯、左側上顎歯は第2～第3前臼歯と第1～第3後臼歯である。また、右側下顎歯は第1～第2前臼歯と第1～第3後臼歯が検出されている。歯牙はいずれも永久歯であって乳歯は検出されていない。歯牙の咬耗は中程度に進んでおり歯根も完成していることから、埋葬されたウシは成獣の個体であったと推定される。

その他の部位の同定にたえない骨片が数点あるが、いずれも頭蓋骨の一部であると思われる。

### 3. ウシの埋葬とその意義

頭蓋骨は骨質が薄く保存されにくいが、上・下顎が鉗合状態で検出されていることから判断して、ウシの頭部が埋葬されていたとみるべきであろう。また、四肢骨、頸、胸・腹部の骨はまったく検出されていないことから考えると、埋葬されたものはウシの頭部のみであって、体幹から切り離したウシの頭部を埋葬したものと考えて良い。すなわち、今回検出されたウシの骨は食物残滓として廃棄されたものではなく、何等かの意図を持って供獻されたものとみることが出来よう。長瀬高浜遺跡7号墳の周溝からはウマの全身骨格が検出されている。また、同遺跡の24号墳の周溝からはウシの歯牙が3点検出されている。このウシの歯は周溝上面から検出されているので、供獻とは断定できないが、今回検出されたウシの頭蓋は埋葬儀式に伴う供獻動物遺体と判断していいように思われる。今後類例を待ちたい。

稿を終るにあたり、ウシ骨の検討の機会を与えられた倉吉市教育委員会の関係各位に御礼申し上げる。

### 4.まとめ

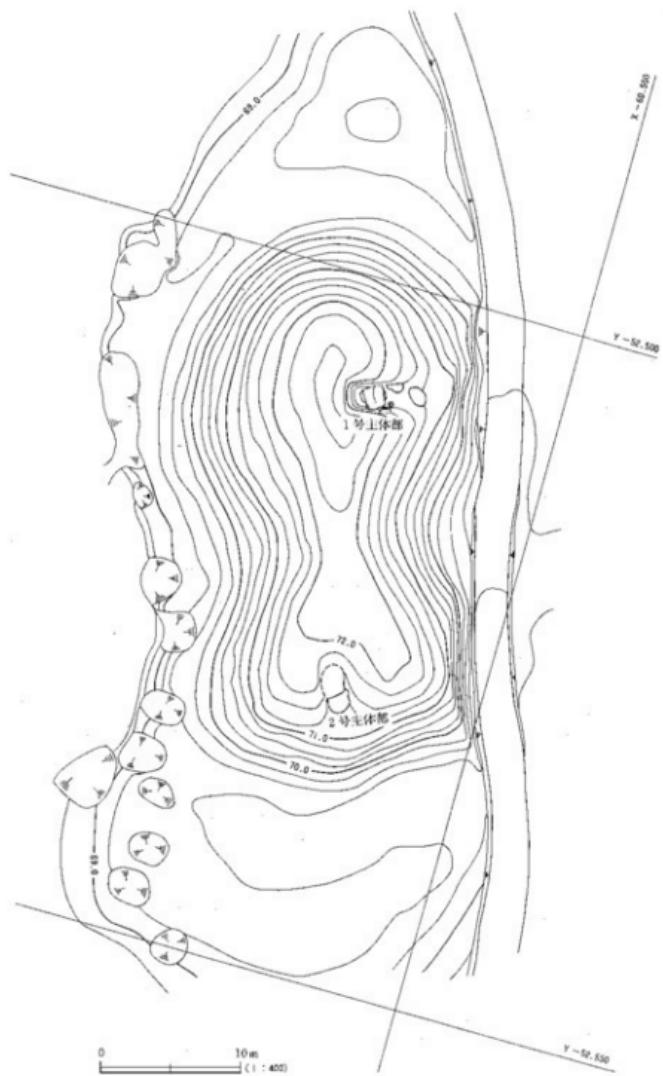
- 1) 倉吉市ニタ子塚遺跡の1号墳の周溝からウシの頭蓋骨の一部と歯牙が検出された。
- 2) 埋葬されたウシは成獣のものである。
- 3) 検出されたウシは頭部のみであり、上・下顎が鉗合状態で検出されていることから体幹から頭部を外し、頭部を供獻したものと考えられる。

### 5.参考文献

井上貴央(1983)「長瀬高浜遺跡より検出した人骨と動物遺体について」「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI」pp. 285-312.鳥取県教育文化財団

## V ニタ子塚 6号墳

調査区の西側約50mの同一丘陵の尾根上、標高約69～72mに立地する前方後円墳である。この古墳は開発地区外であったが、ニタ子塚遺跡を解明する上で重要と考え、平板による墳丘測量を実施した。墳丘全長は41m、周溝と見られる平坦面を含めると約55m、主軸方向はN78°Eで前方部が西南西、後円部が東北東に向く。推定される後円部直径約26m・高さ3m、前方



第31図 ニタ子塚 6号墳墳丘測量図

部幅約26m・高さ2.7mである。主体部は横穴式石室が後円部と前方部に1基ずつ合計2基確認された。後円部の石室を1号主体部、前方部の石室を2号主体部と名付けた。

1号主体部 後円部中央に位置し、主軸と直交して南側に開口する横穴式石室である。天井石、玄門石等の石材が露出しており、石室の長さは3m前後、幅は2m前後と推定される。羨道部若しくは前庭部と推定される平坦地が、長さ約4m・幅約2mにわたって残存する。

2号主体部 前方部中央に位置し、主軸と平行して西側に開口する横穴式石室である。天井石が露出しているが、石室の規模は不明である。羨道部若しくは前庭部と推定される平坦地が約2m四方残存する。

この古墳は、前方部が開き、前方部と後円部の比高差がほとんどない。主体部が横穴式石室である。以上の2点から概ね6世紀代の築造と考える。

(註) 研究者の間ではこの古墳は、津原古墳あるいは半坂3号墳と名付けられていた。しかし、津原は大字の名称で範囲が広く、また半坂3号墳の名称は、そもそも半坂地内に古墳がなく不適切である。この古墳は以前から存在が知られており、小字のニタ子塚という地名は当古墳を示していると考えられる。このためニタ子塚古墳と呼ぶのが妥当であるが、今回発掘したニタ子塚遺跡の遺跡名と混同を招く恐れがあり、ニタ子塚6号墳と名付けることとした。

#### 参考文献

野田 久男 「津原古墳」「前方後円墳集成・中国四国編」 山川出版 1991年

## VI 考 察

### 土壙墓群について

時期 時期決定の判断材料になる遺物が出土したのは、3・5・6号土壙墓と1・2号溝のみである。このうち、3号土壙墓出土の甕底部片1、6号土壙墓出土の甕5は上種第5遺跡7号貯藏穴・27号住居址段階(以下、上種第5)に比定される。1号溝出土の壺9や2号溝出土の壺13はこれより1型式新しく、東高江2号貯藏穴段階(以下、東高江2号)に比定される。また同じく1号溝出土の壺8、5号土壙墓出土の器台3は更に1形式新しい擲塚2号貯藏穴段階(以下、擲塚2号)に比定されるものであった。

このように3形式の土器が出土しており、他の遺構もこの範囲内に納まるものと考えられる。この上種第5～擲塚2号という時期は畿内の庄内期と並行する時期で、あえて実年代を当てはめるならば3世紀後葉から3世紀末、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる。

個々の遺構については、5・6号土壙墓出土遺物は供獻遺物のためそのままの時期と考えて良かろう。しかし3号土壙墓出土遺物は埋土への混入のため、近くにあったそれ以前の古い時期の遺物が入ったものと考えられる。その他の遺構の時期については特定できない。

**立地** 本土壙墓群は標高74m、遺跡内の最高所付近に立地しており、水田面との比高差は約60mある。採石事業のために削られた南東の尾根と1~6号墳が並ぶ尾根との合流点にあたる。西側は丘陵が入り組んでいるが、東側は開けており、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡<sup>註2)</sup>が点在する立縫遺跡群を見晴らすことができる。調査前の分布踏査では、その立地条件とこんなもり盛り上がったような地形から古墳の可能性が指摘されていた。

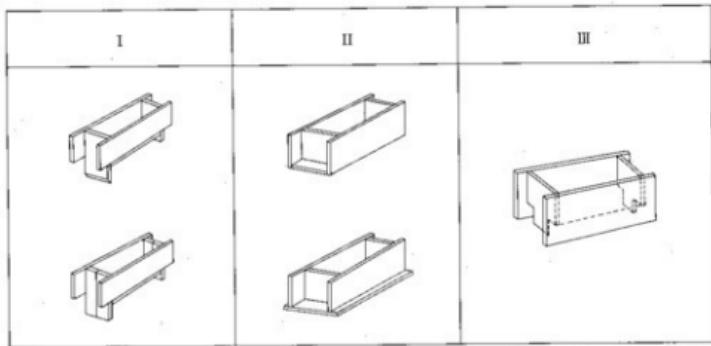
このような丘陵頂部に営まれた土壙墓群としては、県内では鳥取市桂見土壙墓群や鳥取市西桂見土壙墓群<sup>註4)</sup>などが知られており、弥生時代後期後半に散見される。そして、このような土壙墓群は多くの場合これに続く前期の古墳が同一丘陵上に造られるようである。

**墓域の区画** 本土壙墓群の特徴は溝によって3方を区画されている点にある。このように土壙墓群に区画施設を持つ例としては桂見土壙墓群や関金町泰久寺中峯土壙墓群が挙げられる。桂見土壙墓群は墓域を整地し周囲の一部を石列で区画したもので、泰久寺中峯土壙墓群は墓域の一部に鋤先状に貼り石をして区画したものである。本土壙墓群のように溝によって区画される例は、県内では西桂見土壙墓群で2つの土壙墓群を仕切るための溝が検出されている以外は知らない。少し視野を広げると兵庫県豊岡市の立石塙墓群103号地點を類例としてあげられよう。ここでは、浅い直線的な溝で2方を区画された一群やカスガイ型の溝で区画された土壙墓などが検出されている。また、時期も庄内期とされており共通点が多い。

**溝** 本土壙墓群を区画する3方4条の溝は、長さ、深さ、形態、主軸方向に於いて大きく異なっており、古墳やいわゆる方形周溝墓に見られる周溝、後口谷塙丘墓に見られるような区画溝とは様相を異にする。以下、溝に関して若干の考察を加えてみたい。

1号溝は土壙墓群の北を区画する溝である。しかし、両端の折れ曲がるカスガイ型の形態や7号土壙墓との位置関係から考えると、土壙墓群を区画する以上に7号土壙墓との密接な関係が想定される。溝中央の供獻台は溝底から10cm以上浮いた位置で検出されており、溝がある程度埋まってから設置されたと考えられる。このため、出土したまとまった量の土器は7号土壙墓の葬送儀礼として供獻されたものではなく、ある程度時間をおいてから土壙墓群全体に対して供獻された可能性もある。2号溝は土壙墓群の西を区画する溝である。溝としては非常に浅いもので、溝底の土壙墓群側に用途不明の小溝を持つ。また、この溝は4条の溝の中で唯一土壙墓群の主軸に合う溝であり、中心となる4号土壙墓との関連が強いと考えられる。3号溝は2号溝と同様に土壙墓群の西を区画する溝であるが、2号溝の延長線上に位置しない。また形態も大きく異なっており、2号溝とは全く別の性格を持ったものと考えられるが詳細は不明である。4号溝は土壙墓群の南を区画する溝である。形態に大きな特徴はないが、2号溝よりかなり深く、主軸が3号溝同様土壙墓群の主軸と合わない。これは、3・4号溝が墓域の南東方向への拡張に伴って設けられたためか、当初から個々に何等かの特別の役割をもって設けられたためであろう。

このように本土壙墓群を区画する溝は単に「溝」とするには問題が多い。しかし、1・2・



「河内地域の先秦時代木棺の型式と変遷」より抜粋

第32図 木棺型式

3号溝から同一個体の大型甕片が出土しているので、少なくともこれ等の溝は同時に存在し、墓域を区画していたことは間違いない。

**埋葬形態** 今回の調査では10基の土壙墓が検出されたが、その埋葬形態は多種多様であった。大きく、木棺痕跡が検出されたものとされなかったものに分かれ、されたものは更に木棺形態によって分かれる。更に祭壇形態によっても分かれる。

まず、木棺形態による分類をしてみたい。本土壙墓群の木棺は全て腐蝕して失われているため、平面に残る痕跡からの分類となる。また、分類に当たっては沖積低地部で多くの木棺が出土している河内地域の分類（図32参照）<sup>註9)</sup>に従うこととした。検出された7基の木棺墓のうち、I型式に属するものは6・7号の2基、II型式に属するものは1・3・4・9号の4基、III型式に属するものは5号の1基である。I型式は墓壙底に小口痕跡を残すもので、7号は両側で6号は片側で検出された。II型式は墓壙底には木棺痕跡を残さないもので、棺の大きさの2段掘り（1・3・4号）や土層断面の立ち上がり（9号）によって推定される。III型式の墓壙底に小口痕跡と側板痕跡を合わせ持つもので、この型式は底板を持たない。5号は小口痕跡と側板痕跡の深さに差が無いものだが、一般に小口痕跡の方が深いものが主流である。

以上3型式の木棺が使用されているが、段の在り方など細かな点を見ると個々に異なる特徴を持っている。この中で、規模の大小はあるが、唯一全く同じ特徴を持つのが3・4号である。この3・4号は位置・規模・掘り方・主軸方向からみて、土壙墓群内の中心主体と見られる土壙墓である。3・4号の特徴は3段掘りという珍しい掘り方を持つ点にある。下段はおそらく木棺掘り方であろうが中段にはどのような意味があるのだろうか。このような掘り方を持つ類例は時期は異なるがイザ原11号墳<sup>註10)</sup>の主体部に見ることができる。この主体部は一部3段掘りの木棺墓で、中段の縁辺部には蓋を密閉するための灰白色粘土が詰められてい

た。つまり、中段の掘り方は蓋を納めるためのものということになる。3・4号では粘土では無く炭化物が検出されたが性格こそ違え同様に蓋の縁辺部を示すものと考えて良かろう。

次に祭祀形態であるが、共通の特徴を持っているのは5・6号である。5・6号は掘り方の特徴は異なるが、T字状に接するのみでなく、標石を持ち、棺上に注口土器・器台などの遺物を供獻するという共通の墓上祭祀を行なっており、密接な関係が想定される。このような祭祀形態は、出雲地方においては弥生時代後期以降一般的に行なわれているものであるが、県中部ではそれ程一般的なものではなく、阿弥大寺1号墓<sup>註11</sup>3号土壙墓や泰久寺中峯遺跡の第11土壙墓<sup>註12</sup>で見られる程度である。

このような埋葬形態の違いは土壙墓群が存続する時期幅から見て、時期差によるものとは考えられず、階級・性別・年齢・家族（出自）等の違いによるものであろう。

以上、土壙墓群についての考察を思いつくままに書き連ねてきたが、この結果いくつかの特徴が見えてきたように思う。第一は比較的短期間に営まれたこと、第二は見晴らしの良い最高所に立地していること、第三は溝によって区画されること、第四は中心となる埋葬施設を持つこと、第五はグルーピングできるものも有るが多様な埋葬形態を持つことである。これ等の特徴から、本土壙墓群は弥生時代の後期後半に墳丘墓や土壙墓群という形で見られる首長墓的な集団墓の流れの最終段階のものと言えよう。

#### 古墳群について

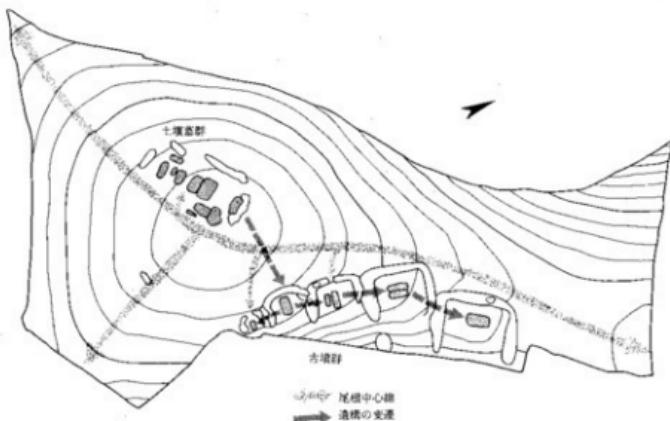
時期 5基とも主体部からの土器の出土が無かったため正確な時期を言うことはできないが、周溝内から出土したわずかな土器と周溝の切り合い関係から時期を推定してみたい。3号墳出土の甕25は口縁部の櫛搔沈線をナデ消す古い特徴を持っているが、全体のプロポーションからみて宮ノ下4・6号住居址段階（以下、宮ノ下4・6号）に比定されるものであろう。また、3号墳の周溝内埋葬施設である土器棺や5号墳出土の甕30も宮ノ下4・6号に比定されるものである。2号墳は甕21・器台23から宮ノ下3B・7号住居址段階（以下、宮ノ下3B・7号）に比定される。1・4号墳は時期決定の判断材料となりうる遺物の出土が無いので、切り合い関係から考えてみたい。切り合いから見た墓造順は次の通りである。

4号墳→3号墳→2号墳→1号墳

△5号墳

これによると1号墳は2号墳より後に造られているので宮ノ下3B・7号以降ということになる。下限は不明だが大きな時期差はないと考えたい。4号墳は3・5号墳より先行するものであるから宮ノ下4・6号以前ということが言えよう。上限は古墳群が土壙墓群より後発のことから上種第5までは遡らないであろう。

以上のことから本古墳群は古墳時代前期、あえて実年代を当てはめるならば3世紀末頃から4世紀中葉にかけて連続的に造られたものと考えられる。



第33図 ニタ子塚遺跡造構変遷模式図

**立地** 土塙墓群が標高74m付近の丘陵頂部に立地するのに対して、古墳群は土塙墓群からやや下った標高71~73mの丘陵東側の傾斜変換点に立地する。土塙墓群と古墳群中最古の4号墳とは直線距離で約12m離れている。大きく立派に見せたいという発想からすれば尾根上のなるべく高い位置に築造するのが普通である。しかし、この古墳群は土塙墓群の周間に大きな余地が在るにも関わらず、土塙墓群を強く意識し、より低位に造られている。これは土塙墓群と古墳群との密接な関係を表わしている。おそらく、この古墳群は、土塙墓群の被葬者集団の直系集団が墓制の変化に対応し、祖先に対する畏敬の念を払いながら築いたのである。尾根から外れた斜面に造られたのも同様の理由と考えられる。3・5号墳の周溝に陸橋が残されていることから尾根上に墓道の存在が推定される(図33参照)。当然この道は古墳群の築造以前に土塙墓群にアクセスするために使われた道であったはずである。この道を壊さないためにあえて斜面に築いたのではなかろうか。2~5号墳が軸をほぼ揃えて築かれているのに1号墳だけ方向を変えたのも、そのまま続けると尾根上に上がってしまうからだと理解できる。また、1号墳の隣に古墳が造られなかったのは、尾根の鞍部にあたるのでスペースが無くなつたためか、古墳の立地条件として要求されるものが変わつためだと考えられる。なお、東側の斜面に築かれたのは被葬者集団が丘陵の東側に集落を形成しており、そこから眺望できる様にしたためだろう。

**墳丘と周溝** 墳丘の規模は南端の5号墳が最小で4・3・2・1と北にいくほど大きくなる。これは4号墳と5号墳との関係を除いて築造順によるもので、新しく造る度に規模を拡大している。5号墳が4号墳の後に造られたにもかかわらず規模が小さいのは、5号墳の主体部

の規模から考えておそらく子供の墓だったためと考えられる。墳形は他の県内の発生期古墳と同様に全て方墳だが、5号墳はかなりいびつな形である。また4号墳は1～3号墳に比べるとやや辺が丸みを帯びている。盛土は1号墳でわずかに残っていたのを除くとほとんど残っていなかった。しかし、主体部の削平状況から1～3号墳は数10cm以上の盛土があったと考えられる。これに対して4・5号墳は主体部の掘り方が深くほとんど削平を感じさせない。おそらく、周溝を掘った土を盛り上げた程度で、「周溝を持った土壙墓」といったイメージの墳墓であったであろう。このように1～5号墳では規模の拡大と共に墳形の定型化や盛土の増加といった変化が有ったと推定される。

周溝は全て尾根側の3方に囲いコの字状に巡る。新しい周溝はすでに有る周溝を意図的に切っており、強い同族意識を感じられる。発生期の古墳は主に地山の削り出しによって墳丘を造る例が多く、本古墳群のように周溝によって囲まれる例は米子市青木遺跡のF地区やH地区<sup>註13)</sup>で見られる程度である。また、3・5号墳にある尾根側中央の陸橋状の掘り残しも青木遺跡FSX01に見ることができる。<sup>註14)</sup>

主体部 盛土の残りが悪かったにもかかわらず、1・4・5号墳各1基、2・3号墳各2基、計7基の主体部が検出された。内訳は1号墳の主体部が竪穴式石槨、2号墳の1・2号主体部と4号墳の主体部が木棺墓、3号墳の1・2号主体部と5号墳の主体部が土壙墓であった。ただし、木棺痕跡が見つけられなかったため土壙墓とした主体部も、木棺墓であった可能性はあろう。3基の木棺墓を土壙墓群と同じ様に型式分類すると、小口・側板痕跡を持つ4号墳の主体部が5号土壙墓と同じIII型式、これに対して、2号墳の1・2号主体部は3・4号土壙墓などと同じII型式であった。この違いが時期差によるものか、土壙墓群からのつながりによるものなのかは大変興味深い問題である。3基の木棺墓のうち2号墳2号主体部は、土壙墓群には見られなかった粘土が検出面と墓壙底で検出された。この内、墓壙底で検出された粘土については粘土枕として報告したが、鳥取市覚寺7号墳で見られるような板状の粘土枕とはかなり様相を異にするもので、若干大き過ぎる嫌いもある。このため、枕ではなく、何等かの理由で棺上に置かれた粘土塊が崩落したものである可能性も示唆しておきたい。<sup>註15)</sup>

主軸は1・2号墳が丘陵尾根筋に平行する東西方向、3～5号墳が丘陵尾根筋に直交する南北方向であった。頭位はあくまで推定の域を出ないが、1号墳主体部、2号墳1・2号主体部はそれぞれ小口の石積みの様子、副葬品の位置、粘土枕の位置から南、3・4・5号墳主体部は小口端から西と考えられる。ここで2号墳から主軸が変わった理由を考えてみたい。主体部の頭位を意識して古墳群と土壙墓群を見ると、全て土壙墓群のある方向に頭位が向いているように見える。のことから、墳丘の1辺に主軸を合わせながら、土壙墓群に頭位が向くように方向を変えたというのは考えられないだろうか。つまり、1・2号墳になると土壙墓群からの距離が遠くなるので、頭位を西側にすると、土壙墓群の方に向かなくなる。そのため、主軸方向を振り替えて頭位を南側にしたということである。特に1号墳の主体部は

墳丘の角度が変わったこともあるって土壙墓群の中心線に近い方向となっており、深い関係があるように思われる。

副葬品は2号墳1号主体部で刀子が1点出土した。これは土壙墓群・周溝内埋葬施設も含めて全19基の埋葬施設中唯一のものである。この刀子は、出土時には3つに折れていたため気がつかなかったが、接合すると刃部が故意に大きく曲げられていることがわかった。このように故意に曲げられた鉄製品が副葬されていた例は、鳥取市桂見1号墳第1主体の鉄劍<sup>註3)</sup>、青木遺跡FSX04の鉈の他、堤谷古墳群など前期の古墳に見られる。山陰の弥生時代の墳丘墓や土壙墓にはほとんど鉄製品の副葬ではなく、県内では阿弥大寺地区第11土壙墓の鉄刀<sup>註12)</sup>、西桂<sup>註13)</sup>見土壙墓群の刀子、鳥取市門上谷1号墓の鉄刀、米子市岡成第9遺跡SX26の刀子など数例があるが、何れも曲げられていなかった。また、古墳時代後期には多くの古墳に鉄製品が副葬されているが、管見によると意図的に曲げられたと考えられる例は見られない。よって、おそらく故意に曲げられた鉄製品を副葬するのは、古墳時代前期特有の葬送儀礼だと考えられる。

1号墳主体部の竪穴式石槨について 竪穴式石槨は前方後円墳の成立に伴い導入される。東伯耆地方で古墳時代前期の竪穴式石槨の例は、向山古墳群宮ノ峰19号墳(方墳・一边27m 倉吉市小田)・21号墳(円墳・径30m)、馬ノ山4号墳(前方後円墳・全長推定100m 羽合町橋津)<sup>註20)</sup>がある。宮ノ峰21号墳は石槨の長さが内法で4.6m、築造時期は出土遺物から4世紀前半代と推定される。馬ノ山4号墳は石槨の長さが内法で8.8m、出土遺物からおよそ4世紀中頃の築造と推定され、ともに長大な割竹形木棺が想定されている。それに比べ、ニタ子塚1号墳は古墳の規模が周溝を含め12.5mで、石槨規模は長さ2.4m、割竹形木棺の復元長さ1.8m、幅0.4mと小さい。しかも一般的な石槨で見られるように、板石を水平に積み上げ蓋石をするのではなく、基底石を立てた上に板石を木棺に立てかけるように持ち送っている。したがってニタ子塚1号墳は、古墳の規模から明らかなように首長級の墓ではなく、宮ノ峰19・21号墳といった首長級の古墳に竪穴式石槨が採用されてから後に、これを模して築造したと考えられる。

1号墳の築造時期は、出土土器よりおよそ4世紀中葉の築造と推定される。また、上神猫山<sup>註21)</sup>3次調査1号墳第3主体は、木棺の両小口に丸く整形した板石を立て両側壁に一列に板石を並べている。これはニタ子塚1号墳の竪穴式石槨と直接結びつかないものの、割竹形木棺に板石を立てかけ囲う点で類似性が認められ、この古墳が築造された時期が土井編年・上神猫山段階であることは、ニタ子塚1号墳の築造時期を考える上で興味深い。

周溝内埋葬施設 周溝内の埋葬施設は3号墳より土器棺墓が、1号墳より牛墓が各1基検出された。

土器棺墓は県内では弥生時代前～中期の土壙墓中に散見される程度で、後期後半の墳丘墓や土壙墓群には見られない。それが古墳時代になると、鳥取市桂見2号墳や会見町善段寺1号墳など古い段階の古墳から、副次的な主体部や周溝内埋葬として一般化する。3号墳の土

器棺は土器型式から、その中でも初現的なものと考えられる。

周溝に埋葬されていた獸骨は、鳥取大学の井上貴央先生に鑑定していただいた結果（詳しく述べは第IV章参照）、牛の頭蓋骨の一部と歯牙であることがわかった。周溝内から牛の骨が検出された例は、羽合町長瀬高浜24号墳<sup>註24)</sup>の他、大栄町上種14号墳<sup>註25)</sup>がある。上種14号墳は6世紀後半の帆立貝式古墳で、頭蓋骨と肩胛骨が検出された。周溝内に獸を埋葬するのは、①被葬者の埋葬時に殉死させた、②古墳の被葬者が飼っていた動物が死んだために追葬した、③時期をおいて子孫が祖先に対して供獻した、④被葬者には直接關係無く、獸を埋葬するのに古墳の周溝を利用した、などが考えられよう。このうち1号墳の牛墓は、周溝がかなり埋まっているから掘り込まれており、1号墳の築造時とは隔絶した時期に造られたものと考えられることと、頭部を切り放して埋葬されたという鑑定結果を踏まえると、③の性格を持つものであろう。

以上、古墳群の時期・立地・墳丘・主体部・副葬品、及び土壙墓群との関係について検討を加えてみた結果、次のような、築造順に伴う遺構の特徴とその変遷過程が見えてきた。

- ①土壙墓群…丘陵頂部に小首長墓が造られ始める
  - ②4号墳…丘陵の傾斜変換点に一墳一墓が造られ始める。
  - ③3号墳…墳形が定型化し、墳丘が高くなる。
  - ④2号墳 1号主体部…鉄製品が副葬される。
  - ⑤2号墳 2号主体部…主体部に粘土が用いられる。
  - ⑥1号墳…主体部が竪穴式石槨になる。
  - ⑦1号墳以降…おそらく立地条件が変わり、離れた尾根上に造られるようになる。
- このように本古墳群は徐々に「古墳」として完成されていくのだが、ここで一つの問題が浮かび上がってきた。それは調査時には「土壙墓群」に対する言葉として漠然と「古墳群」という用語を使ってきたが、果たして1～5号墳は「古墳」と呼んでいいのだろうかという問題である。特に4号墳は、庄内から布留への移行期という微妙な時期、斜面に立地する低墳丘、副葬品を持たない木棺墓など古墳とは呼べないような要素を多々持っている。そのため、「古墳」の他に「墳丘墓」・「方形周溝墓」と呼ぶべきだという考え方もあるように思う。この中で我々は土壙墓群と古墳群との間の遺構上の較差を重視し、集団墓から一墳一墓への移行の背景に弥生時代から古墳時代へのダイナミックな社会変化があったと捉え、1～5号墳を全て「古墳」と呼ぶこととした。ただし、これを以て結論とするのではなく議論の出発点として頂きたい。

## おわりに

今回の調査では、弥生的な墳墓の最終段階である土壙墓群とそれに続く発生期の古墳を検出することができた。本市でも今まで多くの古墳が調査され、いくつかの弥生墳墓の調査もされてきたが、このようなケースは初めてであった。これは本市における古墳時代の始まりを考える上で非常に貴重な資料となった。また、ほとんど実態の解かっていなかった古墳発生期の小首長墓に初めてメスを入れる画期的な調査でもあった。しかし、このような貴重な遺跡の発掘機会を与えられたにも関わらず、その機会を十分に生かすことができなかつたようだ。今後、この報告書が同様の遺跡を研究する際の基礎資料の一つとなれば幸いである。

最後に、末筆ながら調査の実施並びに報告書の作成にあたって、指導・協力・助言を頂いた方々に感謝の意を表したい。

## 註

- (1) 土器編年及びその時期観については、全て参考資料1に発表された土井氏の編年試案による。
- (2) 根鈴輝雄他「立鏡造跡群VI 頭根後谷遺跡発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1991年 なお、以下市町村名の無い遺跡は全て倉吉市所在の遺跡。
- (3) 船井武彦「桂見墳墓群」鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1984年
- (4) 前田均「西桂見遺跡II」鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団 1984年
- (5) 日野琢郎「泰久寺遺跡発掘調査報告一中峯地区一」間金町教育委員会 1984年
- (6) 堀崎誠他「北浦古墳群・立石墳墓群」農岡市教育委員会 1987年
- (7) 弥生時代のいわゆる「方形周溝墓」として報告されている例は、米子市岡成第9遺跡のSD-01-04(註19)がある。
- (8) 森下哲哉「大谷・後口谷墳丘墓発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1986年
- (9) 田中清美「河内地域における弥生時代の木棺の型式と陪葬」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994年
- ⑩ 根鈴輝雄「イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1983年
- ⑪ 東森市良「山陰地方における弥生墳墓の展開と地域的特性」『山陰地方における弥生墳墓の研究』島根大学法学部考古学研究室 1992年
- ⑫ 滝田廣幸「上米積造跡群発掘調査報告一阿弥大寺地区一」倉吉市教育委員会 1981年
- ⑬ 鳥取市桂見1・2号墳(註3)、米子市山原6号墳(参考資料4)など。
- ⑭ 船越元四郎他「青木遺跡発掘調査報告書I F・J地区」鳥取県教育委員会 1976年
- ⑮ 船越元四郎他「青木遺跡発掘調査報告書III A・B・E・H地区」鳥取県教育委員会 1978年
- ⑯ 松下利秀他「覚寺古墳群」徳中国建設弘済会覚寺古墳群発掘調査団 1990年
- ⑰ 現在遺物整理中のため未発表。
- ⑱ 原典にあたれなかつたため、参考資料2による。
- ⑲ 藤原裕子「岡成第9遺跡」米子市教育文化事業団 1993年
- ⑳ 根鈴智津子「向山古墳群宮ノ峰支群の発掘調査から」『文化財だより第22号』倉吉文化財協会 1991年
- ㉑ 大村俊夫「山陰の前期古墳文化の研究I 東伯耆I・東郷池周辺」山陰考古学研究所 1978年
- ㉒ 倉吉市教育委員会編「菰山遺跡第3次発掘調査報告書」倉吉市教育委員会 1985年
- ㉓ 原典にあたれなかつたため、参考資料4による。
- ㉔ 西村彰治他「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI」鳥取県教育文化財団 1983年

- 05 馬淵義則他 『上神西古墳群発掘調査報告』 大栄町教育委員会 1984年
- 06 松井 章 『犠牲となった動物・靈を運ぶ動物』『日本の美術3 人物・動物埴輪』 至文堂 1995年
- 07 古墳時代のいわゆる「方形周溝墓」として報告されている例は、猫山遺跡・青谷町大口第2遺跡・米子市青木遺跡（註15）などがある。
- 箕田廣幸 『上神猫山遺跡発掘調査報告』 倉吉市教育委員会 1979年
- 松下利秀他 『大口遺跡群発掘調査報告（大口第2遺跡）』 青谷町教育委員会 1989年
- 参考資料（順不同）
1. 土井珠美 「鳥取県下の状況」「弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について」 第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986年
  2. 山林雅美 「因幡地方の弥生時代の墓とその様相」 平成6年度埋蔵文化財発掘技術研修会発表資料
  3. 長岡充展 「東伯耆地方の弥生時代の墓とその様相」 平成6年度埋蔵文化財発掘技術研修会発表資料
  4. 久保康二郎 「西伯耆地方の弥生時代の墓とその様相」 平成6年度埋蔵文化財発掘技術研修会発表資料

調査前空中写真

(西より)



調査区空中写真

(西より)

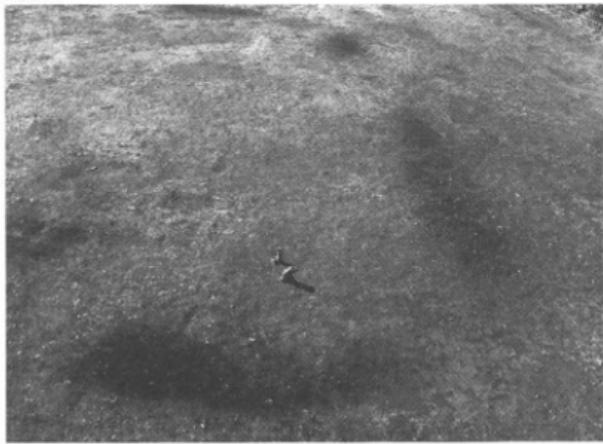


調査後全景

(南西より)



図版 2



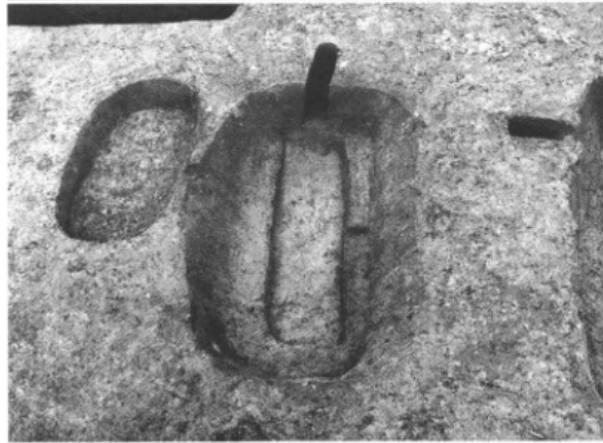
土壤墓群検出状況

(北より)



土壤墓群完掘

(北東より)



1号土壤墓

(南東より)

2号土壙墓

(南東より)



3・4号土壙墓

(右)(左) (北西より)

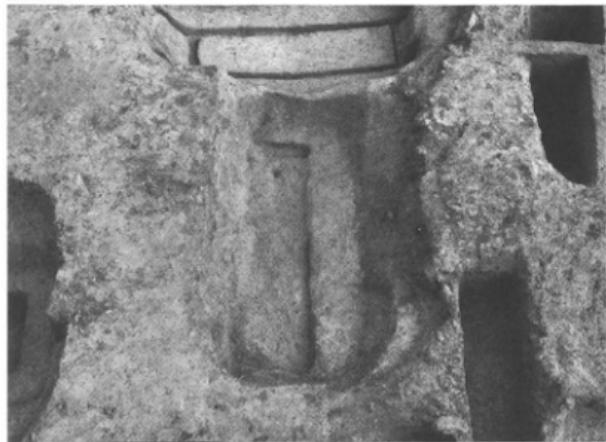


5号土壙墓

(北西より)



図版 4



6号土壙墓

(南西より)



8号土壙墓

(南西より)



9号土壙墓

(北東より)

7号土塙墓・1号溝

(南東より)



1号溝遺物出土状況

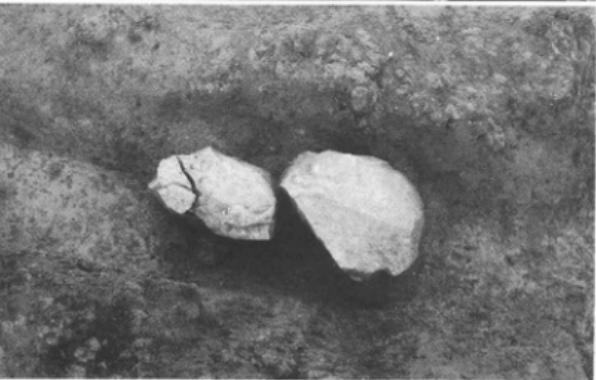
(北より)



1号溝供獻台

出土状況

(北西より)



図版 6



2号溝

(北東より)



3号溝

(南西より)



4号溝

(南東より)



▲ 1～5号墳

(北より)

► 1号墳

(西より)



図版 8



1号墳主体部  
石槨内堀り下げ  
(北東より)



1号墳主体部  
粘土床断面  
(北東より)

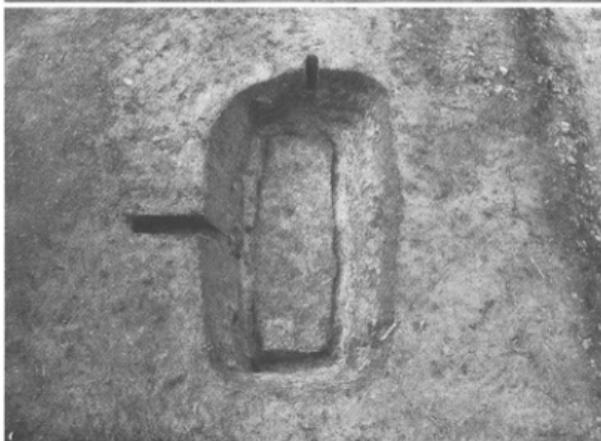


1号墳主体部  
粘土床検出状況  
(北東より)

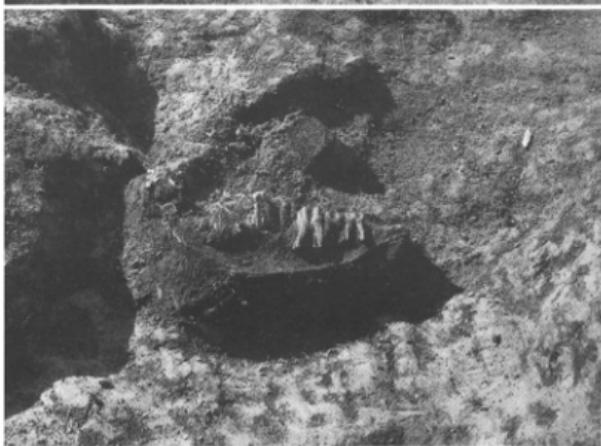
1号墳主体部  
敷石検出状況  
(北東より)



1号墳主体部完掘  
(北東より)



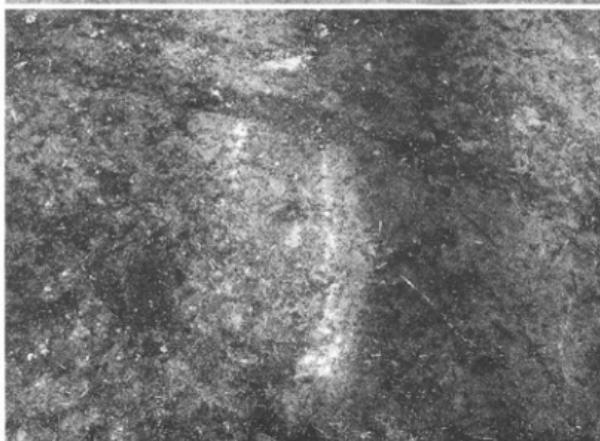
1号墳周溝内  
埋葬施設 (東より)





2号墳

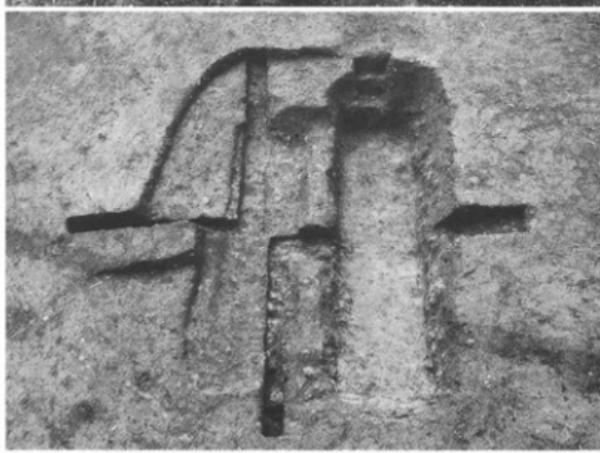
(西より)



2号墳主体部

検出状況

(南より)



2号墳主体部完堀

(北より)

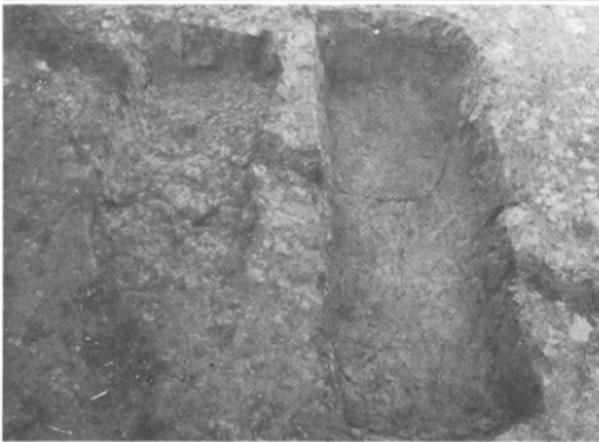
3号墳

(西より)



3号墳主体部

(東より)



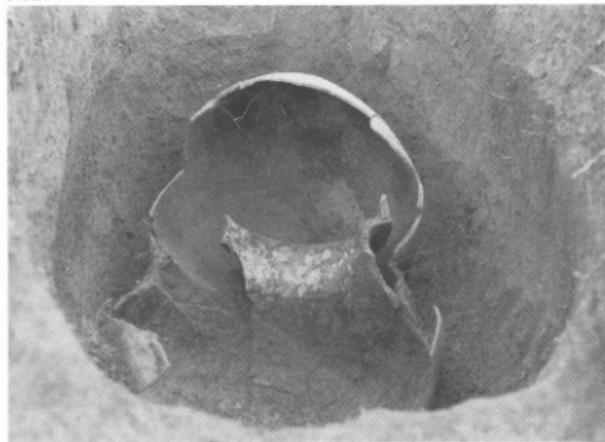
3号墳周溝内

遺物出土状況

(北より)



図版12



3号墳周溝内  
埋葬施設  
土器棺出土状況  
(北より)



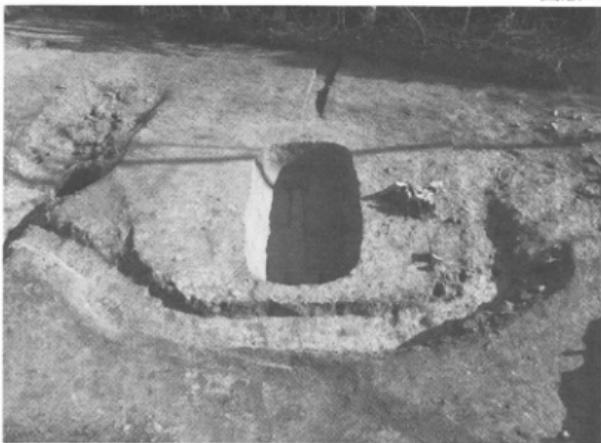
3号墳周溝内  
埋葬施設  
(北より)



3号墳周溝内  
埋葬施設完掘  
(北より)

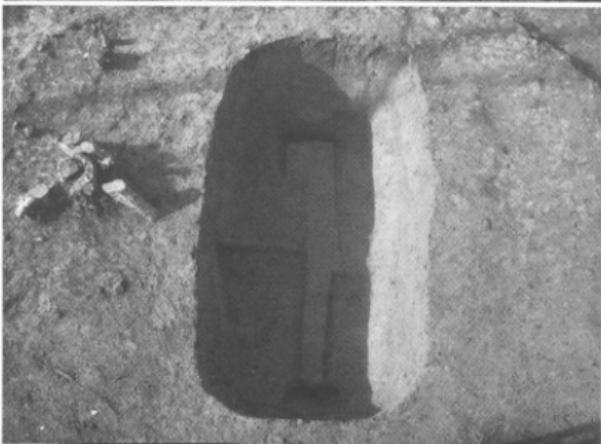
4号墳

(西より)



4号墳主体部

(東より)



5号墳

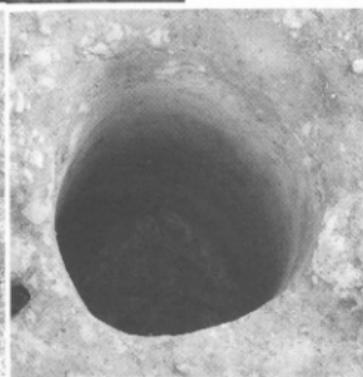
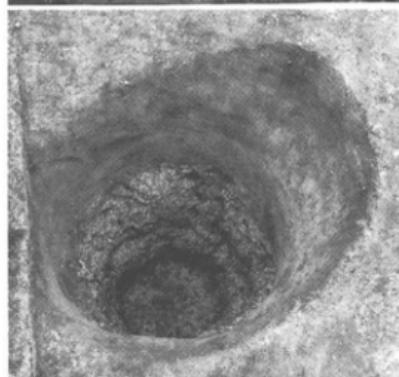
(西より)



図版14



5号填主体部  
(東より)



◀1号土壤  
(北東より)

▶2号土壤  
(北より)

▼3号土壤  
(東より)

ニタ子塚6号墳全景

(南西より)



1号主体部

(南より)



2号主体部

(西より)

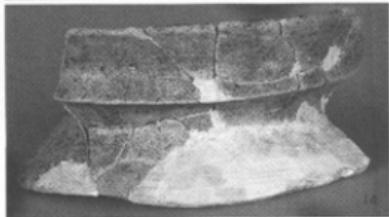




9



5



14



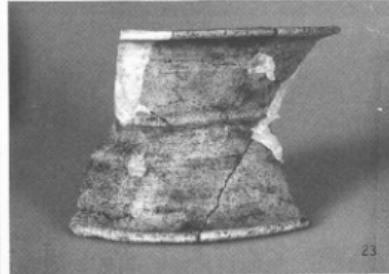
8



19

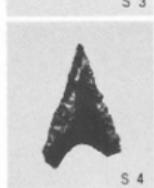
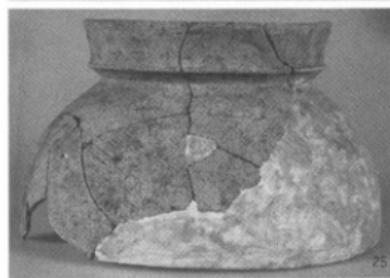
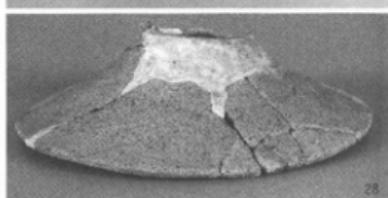
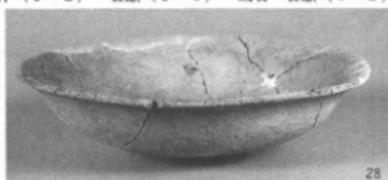


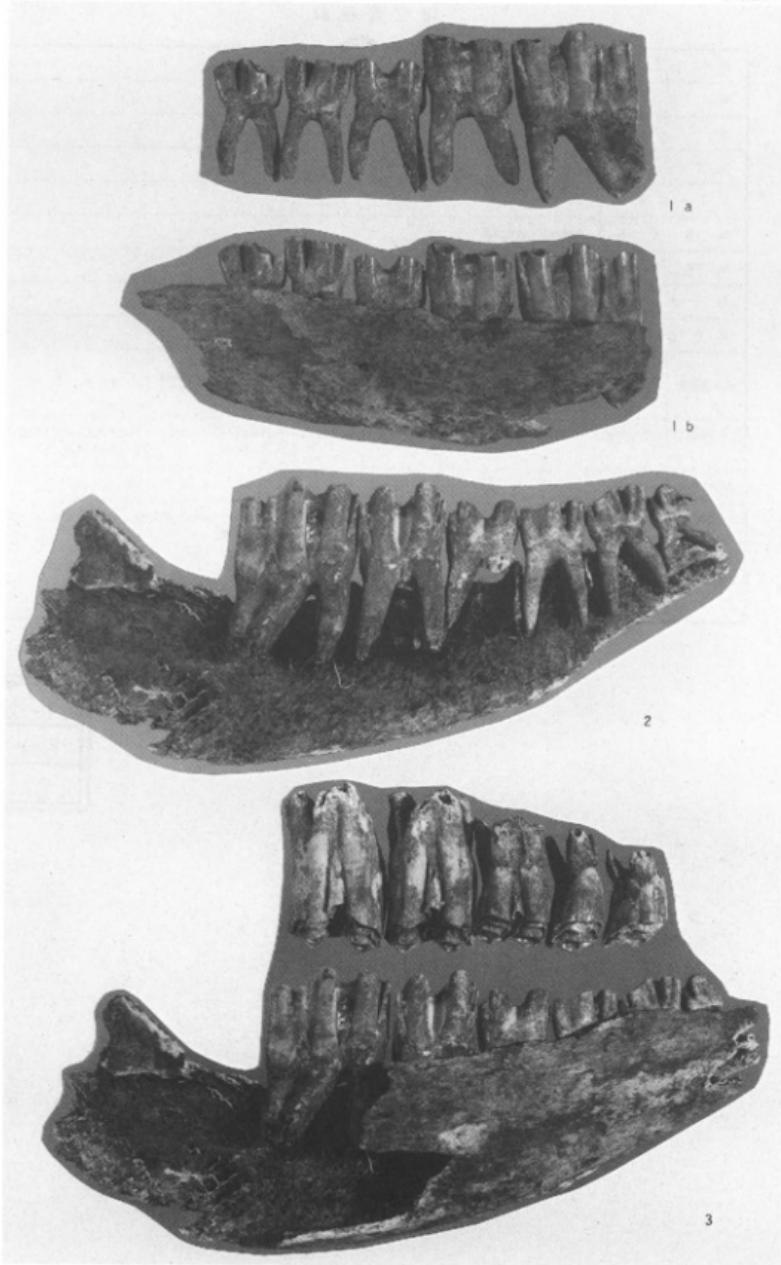
3



23







1. ウシ右下顎歯の舌側面（a）と右下顎歯に下顎骨を付着させたところ（b）

2. ウシ左下顎骨と左下顎歯の舌側面

3. ウシ左上・下顎歯と左下顎骨の舌側面

## 報告書抄録

書名	二子塚跡発掘調査報告書							
調査名								
卷次								
シリーズ名	食吉市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第82集							
編集者名	加藤誠司・高取英雄							
編集機関	食吉市教育委員会							
取材地	〒688 烏取郡食吉町722番地 TEL 0888-22-8111							
発行年月日	西暦1995年3月31日							
所取査跡名	所在地	コード		北緯	東経	測量期間	測定面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		山町村：通路記号						
二子塚跡	食吉市津原字二子塚	31203	4 D T P	35°22'7"	133°45'18"	1994.9.5～ 1994.12.28	3200	因内ダム建設による排水事業に伴う事前調査
所以選擇名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二子塚跡	墳墓・古墳	弥生	上塙墓 16基 古墳 4基 古墳 5基 上塙 3基 (うち蓋し穴 1基)	弥生土器・土師器・鐵斧 刀子・石器	弥生時代末期から古墳時代前期にかけての上塙墓群と古墳群 蓋穴式石室を複数。			

210.2
Kur
(82)

## ニタ子塚遺跡発掘調査報告書

平成7年3月31日 印刷  
平成7年3月31日 発行

編集 倉吉市教育委員会  
発行

印刷 勝美印刷株式会社  
製本